第II章　調　査　概　要

1　調査の経過

調査に至る経過

1983年12月２日、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪(奈良市二条大路南一丁目110－１番地外40筆)における、㈱奈良そごうのデパート建設に伴う埋蔵文化財発掘届が㈱三善を通じて奈良県教育委員会に提出された。敷地面積が約38,673m²、建物面積が約15,000m²と大規模な計画であり、まずは奈良県・市との間で開発に対する協議が重ねられることになった。

1984年４月26日、改めて㈱三善から駐車場建設に限った埋蔵文化財発掘届が奈良県教育委員会に提出され、これを受けて奈良県教育委員会から奈良国立文化財研究所に調査の依頼があった。奈良国立文化財研究所は、当該地が平城宮に近接し、すぐ南に「特別史跡　平城京左京三条二坊宮跡庭園」があることなどから、重要な遺構の存在を予測し、駐車場予定地の隣接地を含めた全体的な調査計画をたて、重要な遺溝を発見した場合には保存措置を構ずるように要望した。

1985年１月30日、奈良国立文化財研究所は駐車場予定地の発掘に着手した。だが、大規模小売店法によるデパートと地元商店との話し合いなどが難航しており、翌日に発掘中止に至った。

その後、地元商店との話し合いがつき、発掘調査が可能となったのは1986年夏のことであった。奈良県教育委員会と㈱三善との間に発掘契約がかわされ、奈良国立文化財研究所が発掘を担当することになった。調査は敷地面積約38,000m²のうち約30,000m²を対象とし、調査期間は1986年９月から２ヶ年半となった。デパート建設予定地の平城京左京三条二坊七坪と八坪を主とし、駐車場予定地の同一・二坪はトレンチ調査とするのがこの時点での計画であった。

調査の進展

最初の発掘は、調査計画に従い、デパート建設予定地の南端、大宮通り沿いからはじめた。第178次調査であり、1986年９月30日に開始し、引き続き北に第184次調査区を設け、1988年２月１日に終了した。左京三条二坊七坪の約90％にあたる約13,000m²の調査によって、７時期にわたる遺構変遷があること、奈良時代前半には一・二・七・八坪の４町(坪)を占有する邸宅が営まれ、この西寄りには塀で区画したなかに大型の建物群を配置していることなどが判明した。

第184次調査が進行していた1987年６月２日、デパートの建設位置が確定し、この北側にある市道を北に付け替え、さらにデパート建設地の西側に約400m²の機械室を設ける計画が提出された。第178・184次調査および既往の第118－15次調査の結果から、西の二坪に中核となる建物群の存在が予想され、当初計画を変更して二坪に調査の重点を移し、八坪はとりあえず市道の付け替え地までとすることになった。これが第186次調査であり、北の八坪を第186次北・北II区、西の二坪を第186次西・西II区として実施した。２区に分かれたのは工事の都合による。調査期間は1987年10月１日から1988年７月20日、調査面積は約5,000m²であった。

第186次調査ではとくに重大な発見があった。第186次北区調査終了直前の1987年12月23日、東辺の井戸を掘り下げ途中に皇族に関わる「帳内」の木簡が出土し、翌年１月８日には赤外線ビデオカメラで「長屋皇宮」の木簡があったことが判明し、４町占地の遺構が長屋王の邸宅であ

次　数	調　査　地　区		期　間	面　積
第178次	6AFI－R	三条二坊七坪	1986.9.30～1987.4.30	6,900m²
第184次	6AFI－S	三条二坊七坪	1987.3.31～1988.2.1	6,000m²
第186次北	6AFI－T	三条二坊八坪	1987.10.1～1987.12.25	850m²
第186次西	6AFI－S	三条二坊二坪	1987.10.26～1988.7.20	3,100m²
第186次北II	6AFI－S・T	三条二坊八坪	1988.1.20～1988.3.15	680m²
第186次西II	6AFI－S・T	三条二坊一・二坪	1988.1.27～1988.3.23	400m²
第186次補足	6AFI－S・T	三条二坊八坪	1988.7.12～1988.8.23	1,050m²
第190次	6AFI－S・T	三条二坊一・二坪	1988.5.19～1988.11.25	2,700m²
第193次A	6AFI－R・S	二坊々間路	1988.7.1～1988.9.26	770m²
第193次B	6AFI－T・U	三条二坊八坪 東二坊々間路 二条大路	1988. 7 .12～1988.12.8	700m²
第193次C	6AFI－U	二条大路	1988.9.16～1988.9.29	120m²
第193次D	6AFI－R・S	三条二坊七坪	1988.8.1～1988.8.13	770m²
第193次E	6AFI－T	三条二坊八坪	1988.8.26～1988.9.3	120m²
第193次B補足	6AFI－U	東二坊々間路	1989.1.27～1989.2.14	120m²
第193次F	6AFI－T	三条二坊八坪	1989.5.16～1989.5.29 1989.6.30	60m²
第195次北	6AFI－T・U	三条二坊一坪	1988.10.25～1989.1.12	1.050m²
第195次南	6AFI－T	三条二坊一坪	1989.2.14～1989.3.10	550m²
第197次	6AFI－T・U	三条二坊一坪 二条大路	1988.12.13～1989.3.17	3.460m²
第198次A	6AFF－J	二条大路	1989.1.19～1989.2.3	200m²
第198次B	6AFF－J・K	二条二坊五坪 二条大路	1989.3.28～1989.5.16	880m²
第198次C	6AFI－U	二条大路	1989.5.8～1989.5.15	40m²
第200次	6AFI－U	三条二坊八坪 二条大路	1989.3.2～1989.4.20	310m²
第200次補足	6AFI－U	二条大路	1989.7.11～1989.7.15	40m²
第204次	6AFF－J・K	二条二坊五坪 二条大路	1989.7.25～1989.9.6	870m²
第32次	6AAI－ L～O他	三条二坊一坪 二条大路他	1965.12.1～1965.4.15	6,000m²
第103－1次	6AFI－R・S	三条二坊七坪	1977.4.23～1977.6.2	900m²
第112－3次	6AFI－R・S	三条二坊七坪	1978.7.1～1978.7.21	300m²
第118－15次	6AFI－R	三条二坊二坪 東二坊々間路	1979.10.2～1979.10.6	150m²
第118－23次	6AFI－R	三条二坊七坪	1979.12.17～1979.12.21	160m²
第123－26次	6AFF－K	東二坊々間路	1980.12.8～1980.12.16	45m²
第141－35次	6AFI－R	三条二坊七坪	1982.3.7～1982.4.12	360m²
第202－13次	6AFF－J	三条二坊五坪 東二坊々間路	1990.1.29～1990.3.3	180m²
第223－13次	6AFF－K	東二坊々間路	1991.10.7～1991.10.16	80m²
奈良市第156次	6AFF－J	二条二坊立坪	1988.7.1～1988.7.23	160m²

Tab.1　各次調査の期間と面積

るらしいと推測されたことである。そして、第186次西区ではその正殿と目される床面積約360㎡の、京内最大の建物を検出したことである。俄に遺跡に対する展望が開けてきたわけである。

「長屋皇宮」木簡が出土した直後の1988年１月13日から数次にわたって、奈良県教育委員会と㈱奈良そごう、それに奈良国立文化財研究所の三者で協議した。調査については、デパート建設地内と東辺の菰川沿いの道路予定地を1988年８月を目標に終了し、駐車場予定地の一・二坪もできる限り発掘する方針となった。遺構保存については話し合いが難航した。結果的には、工法上からデパート建設地は地表下５ｍまで掘削して土壌改良する方法を回避することができなかったが、一坪に計画した機械室は位置を西にずらし、正殿は保存することができた。

1988年夏からはデパートの本格的な建設工事がはじまり、発掘調査は工事と併行し錯綜するようになる。敷地東辺の菰川沿いや敷地北辺の近畿日本鉄道沿いを1988年７月１日から1989年２月14日に第193次Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区、Ｂ区補足調査として、第186次北・北II区に南接する市道部分を1988年７月29日から８月23日に第186次補足調査として実施した。この期間中、1988年８月26日の夕刻に、調査を放棄したデパート建設地の北東隅で重機の掘削にかかった落込みを発見し、急拠第193次Ｅ区として９月３日まで休日を返上して調査した。長屋王家に関わる厖大な量の木簡が出土し、このつづきは1989年５月16日から５月29日まで第193次Ｆ区として調査した。これらの調査面積は総計約2,900㎡であった。

第193次Ｅ区の調査で出土した多量の木簡から、４町を占有する時期の遺跡が長屋王邸であることが確定したが、すでに重機による掘削は広い範囲に及んでいた。東辺の一連の調査では

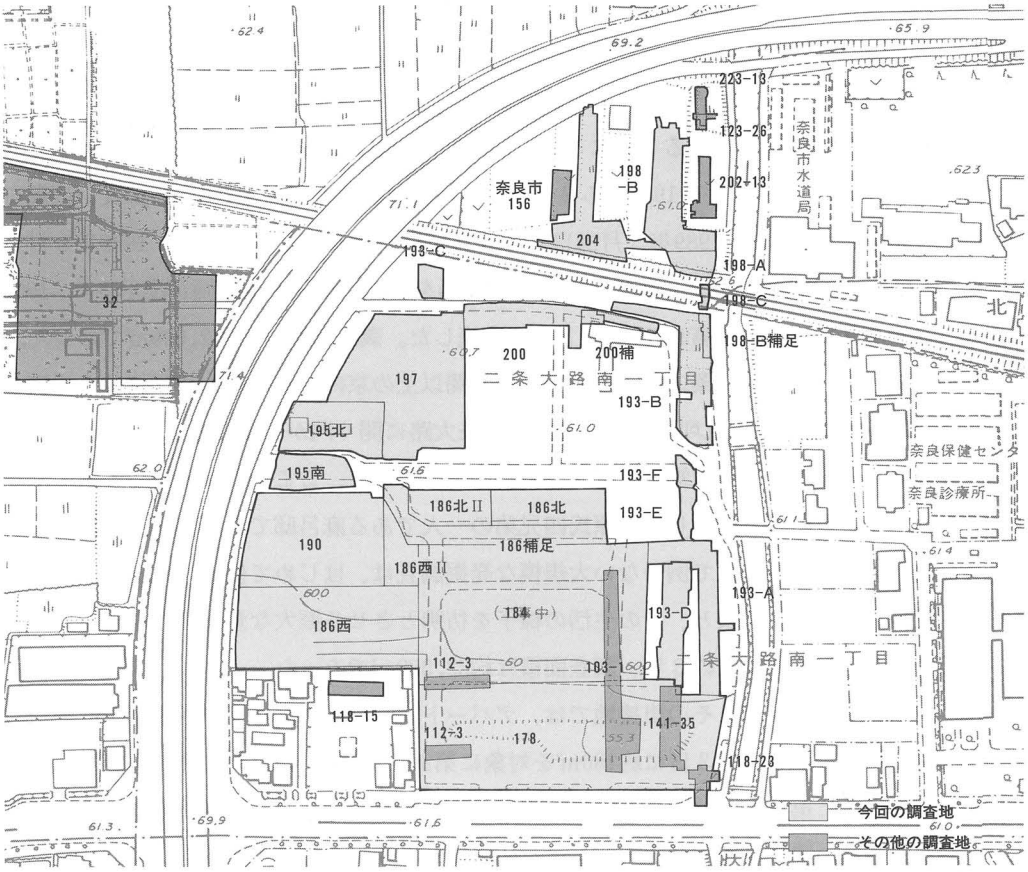


Fig.1　調査次数と区域

東二坊々間路や二条大路を検出し、邸宅の西・北限が判明するとともに、二条大路上には木簡や木製品・土器を多量に含む濠状の遺構があり、西に延びることがわかった。また、第186次補足調査では4町占地のときの中核となる建物群の北限の塀を検出したが、この北東と北西にも塀による区画があることがわかり、調査を一・八坪に及ぼすことが望まれた。

デパート建設地内の調査が一息ついた1989年10月1日からは、西北部の一・二坪にあたる駐車場予定地の本格的調査を開始した。第190次調査であり、引き続き北に市道を挟んで第195次北区と南区、さらに第197次調査区を設けた。調査面積は約5,100㎡であり、1989年3月17日に終了した。これらの調査では、4町占地のときの北西と北東の区画塀を検出し、この区画の間が通路となり、北端では二条大路に面して門が開くことが判明した。また、北西区画では内部を細かく仕切った事務所風の長大な建物があること、井戸から「地子米」の木簡が出土し、この地が奈良時代末頃には太政官と何らかの関わりをもっていたことなどがわかった。第193次B区で検出していた濠状の遺構は、北門近くまで延び、ここでも木簡や木製品などを多量に出土したことから、全体を完掘することが望まれた。

1988年12月、㈱奈良そごう側との交渉によって、二条大路上の濠状の遺構を完掘することになった。第200次調査であり、1989年3月2日から4月20日に実施し、一部は工事の都合上1989年7月11日から7月15日に第200次補足調査として実施して、天平年間に限られる多量の遺物を発掘することができた。この調査をもって、デパート建設に関わる左京三条二坊一・二・七・八坪の調査は、ほぼ当初計画通りに終了した。

追加調査

1988年12月にはさらに、敷地東辺の菰川沿いの道路を北に延ばし、近畿日本鉄道下を地下道として北の国道24号線バイパスに接続させる計画が具体化した。奈良県教育委員会と㈱奈良そごう、それに奈良国立文化財研究所の三者が協議し、デパート建設地の調査の目途がたった時点で本研究所がその調査にあたることになった。第198次調査であり、近畿日本鉄道のすぐ北側で第198次A調査を1989年1月19日から2月3日に、のちこの北側で第198次B調査、近畿日本鉄道下で第198次C調査を1989年3月28日から5月16日まで実施した。また、1989年6月12日には、第198次B区西側の左京二条二坊五坪に駐車場を新たに建設する計画が提示され、1987年7月11日から9月6日まで第204次調査として実施した。調査面積は計約2,000㎡であった。

これらの調査では、左京二条二坊五坪内で桁行20間以上の京内最長の建物や回廊状の遺構など7時期の変遷があること、五坪の南端中央には二条大路に開く門があることなどがわかり、さらに二条大路上の北端部には南端に対応する濠状の遺構があり、ここから出土した多量の木簡などから、五坪が長屋王と敵対した藤原氏四兄弟の一人である麻呂邸であることが推測された。

平城京内においてはこれまで例のない大規模な発掘調査は、はじめて住人、しかも歴史上の人物を特定できるという成果と、その生活の様子を彷彿とさせる厖大な量の資料を得ることによって終了した。調査期間は約3年、調査面積は約32,000㎡であった。

なお、左京二条二坊五坪とその東接地では、デパート建設以後に駐車場や店舗建設計画があり、1990年1月29日から3月3日に約180㎡を対象に第202－13次、1991年10月7日から10月16日に約80㎡を対象に第223－13次調査を奈良国立文化財研究所が実施し、東二坊々間路西側溝から木簡など多くの遺物を発掘するとともに、西側溝から左京二条二坊五坪内に導水した便所遺構などを検出した。

2　調査地域

A　位置と環境（Fig. 2、付図2）

平城京は、北の奈良山丘陵、東の春日山系、西の矢田丘陵から派生する支丘上と、中小の河川によって形成された沖積地上に営まれた。平城宮は、この北端中央に位置し、内裏や東の大極殿・朝堂院（第二次大極殿・朝堂院）と東院や法華寺とが、奈良山丘陵からのびる二つの大きな支丘上にのっている。

調査地は東院や法華寺がのる支丘末端の東南緩斜面に位置する（Fig. 2）。平城宮に近接した平城京左京三条二坊一・二・七・八坪および二条二坊五坪にあたり、すぐ東を菰川が南流する。菰川は、奈良山丘陵東端の鴻池付近を源として南西に流れ、調査地の東北部で直に折れて南流する。南北方向の流路は、平城京の東二坊々間路にほぼ沿っており、奈良時代には人為的に流路をかえて東二坊々間路の東側溝として都城計画に組み込まれ、運河としても利用されたと推測されている[1]。

菰川旧流路

菰川の旧流路については、今回の調査区の東南隅（第178次、第193次A区）や南隣の六坪の調査[2]で、北東から西南方向に蛇行する幅15m前後のSD1560を検出している。この上流は左京三条二坊十坪（第83次）や十六坪[3]のSD880、左京二条四坊九坪のSD29・30（第131－16次）のようであり、ともに北東から南西方向に流れる。出土遺物は弥生・古墳時代の他、7世紀の土器を含む場合もあり、若干の流路の変更はあっても平城京造営直前までの長い期間にわたって存続したことがわかる。

調査地周辺は、平城京内で最も調査が進んだ地域であり、平城京の様相だけでなく、それ以前の遺跡の様相も次第に明らかとなってきている（Fig. 2、付図2）。

旧石器時代

この地域の歴史は今から2万年近く前の旧石器時代にまで遡る。奈良市においてはじめて旧石器を発掘したのは、左京二条二坊十四坪の調査[4]（第189次）であり、今回の調査（第186次西区）でも出土した。ともに旧菰川右岸にあたる。

縄文時代

縄文時代では、左京三条四坊七坪の調査[5]（第116次）で、佐保川の旧流路やその左岸の土坑から後期前葉頃の土器[6]が出土し、今回の調査区でも縄文時代の可能性がある石鏃が出土している。奈良盆地北辺では他に、平城宮域内の佐紀池の底で縄文中期の土器（第101次）、西隆寺境内にあたる秋篠川右岸では水路とこの中から縄文晩期末葉の土器が出土している。水路は人為的に掘ったものであり、稲作農耕の開始と関わることが示唆されている[7]。

1）岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」（奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』）1974，pp.40・41
2）奈良国立文化財研究所（以下、奈文研と略す）『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986，pp.16・17
3）奈文研『平城京左京三条二坊』1975，p.6，奈良市教育委員会（以下、奈良市教委と略す）『奈良市埋蔵文化財調査報告書』平成元・三年度（以下、『平成元年度奈良市埋文報』などと略す）1990，p.47，1992，p.78
4）奈文研『昭和56年度平城宮概報』1982，pp.75～77
5）奈文研『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980，p.18
6）奈文研『昭和51年度平城宮概報』1977，p.28
7）奈文研『西隆寺発掘調査報告書』1993，pp.82・83

弥生時代　弥生時代では、1963年度に平城宮西南隅の調査（第14次）において、主として後期（Ⅴ様式）の竪穴住居跡18棟や溝数条と方形周溝墓・壷棺などを検出している。奈良盆地北辺における集落の最初の発見である[1]。今回の調査地では、弥生時代の遺構を検出していないが、この時代の石鏃が出土している。既述したように、菰川の旧流路は弥生時代にまで遡るようであり、東方の左京三条三坊三坪の調査[2]では前期の土器を含む溝も発見されている。西方では平城宮の壬生門の北や南で前期の集落の存在がわずかずつ明らかになっている。壬生門北の調査（第216次、第224次など）で発見した円形や方形の竪穴住居跡５棟とⅠ様式の土器や石包丁・石剣・石鏃・石槍など、壬生門南方の左京三条一坊十坪の調査[3]で発見した円形土坑とⅠ様式の土器や木製の竪杵・竪櫛・高杯などである。これらは平城宮の内裏と東の朝堂院（第２次朝堂院）が位置する丘陵の先端に営まれた南北300mをこえる集落と推定され、花粉（プラント・オパール）の分析から周囲に水田のあった可能性が高いこと、少量ながら中期の土器も出土しており長く存続したことなどが窺われる。

古墳時代　古墳時代では、平城宮の南辺部において、前期～後期にわたる遺跡の様相が明らかになりつつある。前期（４世紀）の遺構は、平城宮の西の朝堂院南方（第146次[4]）や東の朝堂院（第238次[5]）の下層で、竪穴住居跡数棟と若干の細溝・土坑を発見している程度である。中期（５世紀）には幅８～10mの幹線流路２条が約230mの距離をおいてともに北西から東南方向に流れる。その一つは平城宮の西の朝堂院南方（第146次、第185次[6]）で検出した南の幹線流路であり、他の一つは平城宮の東の朝集殿やその東南（第48次、第238次[7]）で検出した北の幹線流路である。南北二つの幹線水路の間や、南の幹線水路の西方では、２時期にわたる竪穴住居跡や小規模な掘立柱建物、井戸、土坑や小流路などからなる集落が形成されていたようである。付近の小流路や遺物包含層などから６・７世紀の遺物が出土しており、集落はこの時期にも存続したことがわかる。南の幹線流路から南西約200mにあたる平城宮朱雀門南方の調査[8]では、５世紀後半～６世紀前半の小規模な掘立柱建物・土坑・溝を検出し、これらが下ッ道の側溝より古いことを明らかにした。

下ッ道　下ッ道は、それまでの遺構が自然地形にそって方位を西北－東南、東北－西南にとるのに対して正南北を示し、人為的に計画・施工された道路と解される。出土遺物からみて平城京造営直前まで機能していたことは明らかである。また、朱雀門の北では、「五十戸家」の墨書土器や「大野里」の木簡があり、平城宮造営直前に付近に集落があった可能性が強い[9]。下ッ道の開削時期についてはまだ明らかでないが、『日本書紀』推古21年（613）の「自難波至京置大道」の記事と関連させ、７世紀初頭頃に官道として整備された可能性が考えられている[10]。

1）奈文研『奈良国立文化財研究所年報1965』(以下、『年報1965』などと略す）1965，pp.30～32
2）奈良市教委『平成４年度奈良市埋文報』1993，p.32
3）奈良市教委『平成２年度奈良市埋文報』1991，pp.82～84
4）奈文研『昭和57年度平城宮概報』1983，pp.30～35
5）奈文研『1992年度平城宮概報』1993，pp.45～46
6）奈文研『昭和58年度平城宮概報』1984，pp.１・２。註４）を参照。
7）奈文研『平城宮発掘調査報告Ⅹ』1981(以下、『平城宮報告Ⅹ』などと略す）pp.11～14。註５）を参照。
8）奈良市教委『昭和61年度奈良市埋文報』1987，p.１～６，1988，p.45
9）奈良市『平城京朱雀大路報告』1974，p.９・10，奈文研『平城宮報告ⅠⅩ』1978，pp.36・37・92～95
10）岸俊男「大和の古道」(橿原考古学研究所『日本古文化論攷』)1970，p.403

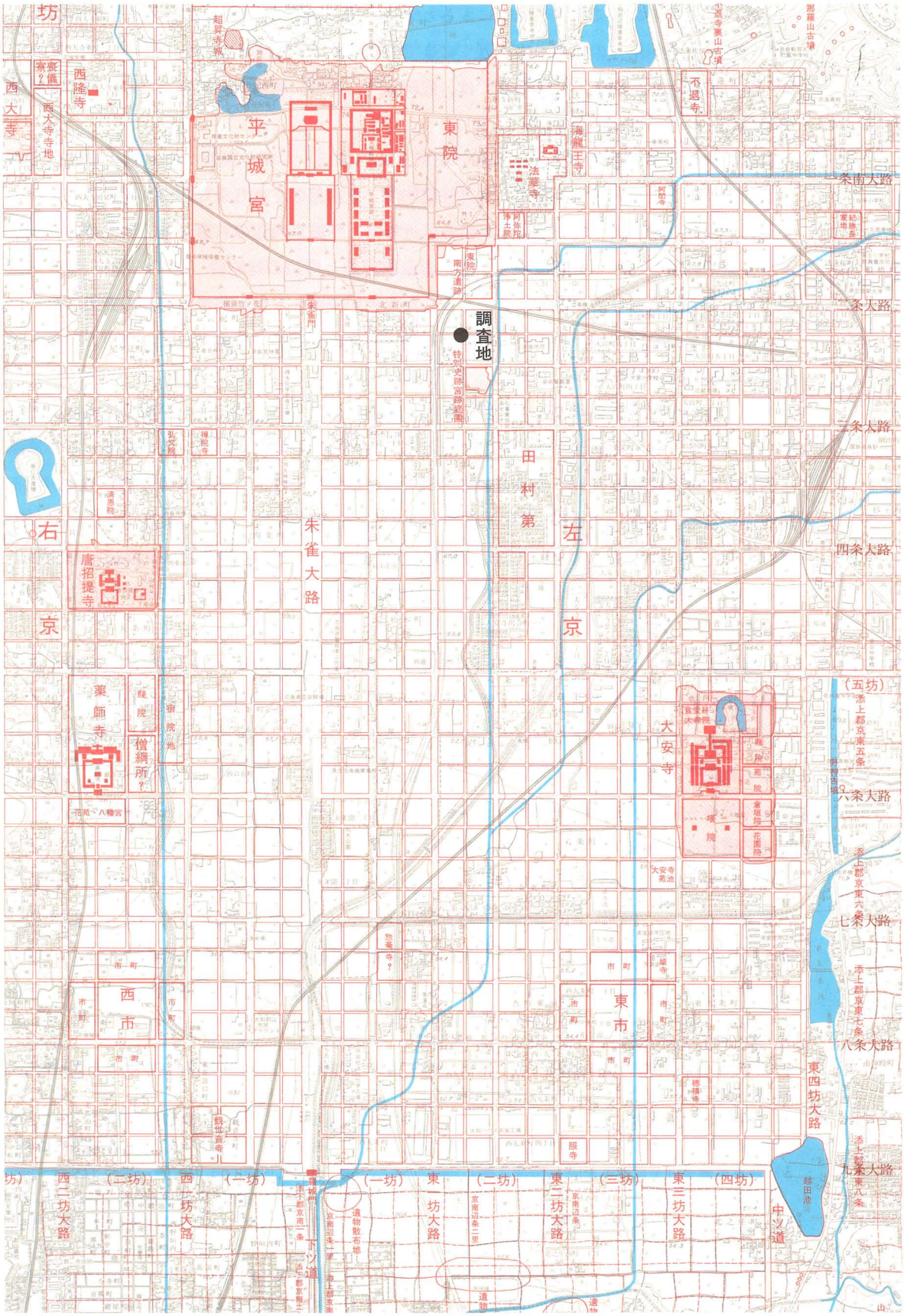


Fig.2　調査位置図(奈良市作成「平城京条坊復元図」を使用)　1：25000

なお、平城宮の北辺では、5世紀に入ると大型の前方後円墳群、佐紀盾列古墳群が形成され、小型の円・方墳が南方の前期の集落近くにまでおよぶことが明らかになっている[1]（第238次）。さらに、平城宮東院地区の丘陵南端では、佐紀盾列古墳群に埴輪を供給したとみられる窯数基を確認している[2]（第243次、第245－1次）。

古墳時代の集落は他に、平城京南辺の左京八条一坊三・六坪の調査[3]（第160次）において溝で区画された5世紀末～6世紀末の掘立柱建物群、東南部の左京五条五坊十五坪の調査[4]において6世紀の掘立柱建物や溝を検出している。近年は、平城京西辺の右京三条三坊二坪の調査[5]によって濠で区画された5世紀後半～7世紀の豪族居館と周辺の建物群（菅原東遺跡）、京外南東部の南紀寺遺跡における石積の濠をめぐらした5世紀中頃～6世紀前半の居館[6]の発見をみている。後者はまだ全容がつかめていないが、規模が大きく、前者の居館は一辺（内寸法）約40mと居館としてはやや規模が小さい[7]。

古墳時代の居館

今回の調査地東南部を東北から南西に蛇行する旧菰川は、弥生時代から平城京造営時まで存続していたことはすでに触れた。付近における既往の調査では旧菰川やこれに関連する小流路を検出した程度に止まるが、今回の調査地内では後述するように、旧菰川の流路と方向が揃う濠をめぐらした居館（内寸法　推定一辺38～39m）と、正南北に近い方向の濠をめぐらした居館（内寸法　約80×50～70m）を発見した。前者は5世紀後半頃であり、後者は7世紀と推測している。後者は居館としては比較的大きく、この地が政治的に重要な位置を占めていたことが窺われる。

平城京の様相

平城京における宅地の大きさは、『日本書紀』の持統5年（691）条に記載がある藤原京の班給基準に準じて、右大臣が4町、四位以上が2町、五位以上が1町、六位以下が1町以下と考えている。4町もしくはそれ以上の宅地をもつのは、のちに法華寺となる平城宮東隣の太政大臣・藤原不比等邸、のちに唐招提寺となる新田部親王邸、左京四条二坊の東半八町を占める可能性がある太政大臣藤原仲麻呂の田村第などである[8]。史料からみると、五位以上の高位・高官は平城宮に近い五条大路以北に多くが居住したようである[9]。

今回調査を実施した左京三条二坊一・二・七・八坪や二条二坊五坪とその周辺は、これまでの調査によって、1町以上の宅地の占める割合がとくに高いことが判明している。三条二坊では、調査地に南接する三[10]・四[11]・七[12]坪がほぼ奈良時代を通じていずれも1町占地であり、とくに七坪では奈良時代後半頃になると平城宮の東院庭園に匹敵する石組の曲池が作られることか

1）奈文研『1993年度平城宮概報』1994，pp.42～50
2）奈文研『1993年度平城宮概報』1994，pp.42～50
3）奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985，pp.18～25
4）奈良市教委『平成6年度奈良市埋文報』1995
5）奈良市教委『平成5年度奈良市埋文報』1994，pp.26～38
6）奈良市教委『平成6年度奈良市埋文報』1995（南紀寺跡第4次）
7）泉南市教育委員会『古代の豪族』（第5回歴史の華ひらく泉南シンポジウム）1992，pp.47・78～81
8）田村第の比定に関する学説の整理は以下の報告。奈文研『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告』1985，pp.1～9
9）奈文研『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983，pp.38・39
10）集成は以下の報告。奈良県教育委員会（以下、奈良県教委と略す）『1988年度奈良県遺跡調査報告』第二分冊，1989，pp.54～59
11）奈文研『昭和61年度平城宮概報』1986，pp.58～60（第174－10次），同『1990年度平城宮概報』1991，p.81～91（第215－16次），奈良市教委『平成5年度奈良市埋文報』1994，pp.91～93（市第280次）
12）奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986，奈良市教委『昭和62年度奈良市埋文報』1988，p.33（市第137次）

ら、離宮あるいは親王の邸宅であった可能性が考えられている。ただし、奈良時代前半は、六坪の蛇行溝が今回調査した七坪の蛇行溝SD4150とつながると考え、三・六坪が一・二・七・八坪と一体として利用された可能性も指摘されている[1)]。

調査地東方の十五坪はほぼ奈良時代を通じて1町を占有し、九・十六坪もその可能性がある。このうち十五坪では、宅地内を塀で区画しその各々に南北に並ぶ主屋と副屋があることから、大家族の同居が推測されている[2)]。ただし、今回調査した長屋王邸では、居住区画と儀式的区画とが設けられていた可能性が指摘(『長屋王既報』p.86) されており、再検討する必要がある。十六坪では、南面築地の中央と西に門が開き、西半には南北に主屋と副屋を並べるが、東半には大規模な建物はみられない[3)]。正門と脇門をもつ例は平城宮以外では検出していないが、坪の中軸線上に附属する建物があることから、一町占地で西半に中核となる建物を配置したとする指摘も充分ありえよう。東南の十三坪も中軸線上に建物があり、少なくとも一時期は1町占地であったと推測している[4)]。

二条二坊では、六坪の調査[5)] (第68次) において東二坊々間路が広いこと、この西側溝上には長大な建物 (橋？) が建つことなどを摑んだ。平城宮東院に南接する地であり、六坪だけでなく三～五坪を含めた4町は、「東院南方遺跡」と呼び、平城宮と密接なつながりをもつ区域と考えている。西の十一～十四坪については三坊々間西小路を確認[6)]しており、十一・十二坪と十三・十四坪とは宅地を異にしたことがわかる。このうち十二坪[7)]では、坪の中央に大規模な建物をおき複廊で囲んでいること、のち回廊内に規模の小さな石組池を設けていることなどが判明している。少なくとも奈良時代前半は1町ないし2町を占有し、離宮あるいは公的な宴遊施設と推定している。十三[8)]・十四坪[9)]では各坪の東西あるいは南北中軸線上に溝や塀を検出し、奈良時代には1/2町であったと考えている。

四条二坊の東半は、先に触れたように藤原仲麻呂の田村第であり、8町 (九～十六坪) を占める可能性がある。十五坪の調査[10)]では、京内では稀な礎石建物を発見しているが、この付近が中核になるかはまだ明らかでない。九・十六坪の調査[11)]では、四条々間北小路を検出し、奈良時代中頃までは九・十六坪は以南とは宅地を異にしていたことが判明している。四条二坊の北東部、一坪の調査[12)]では、奈良時代前半から後半にかけて1町を占有したこと、前半には中軸線上に4面庇付の主屋、その脇に南北棟をおくコ字形配置を取るらしいこと、後半には主屋を建て直してこの周囲を単廊が囲むことを摑んだ。

---

1) 金子裕之「長屋王は左道を学んだか」『歴史読本』491, 1988, pp.146・147
2) 奈文研『平城京左京三条二坊』1975, p.48・49
3) 集成は以下の報告。奈良市教委『平成4年度奈良市埋文報』1993, pp.88～92 (第262次)
4) 奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条二坊十三坪』1975
5) 奈良研『年報1971』p.27
6) 奈良市教委『昭和63年度奈良市埋文報』1989, pp.17・18 (市第151次)。註7)を参照。
7) 奈良市教委『平城京左京二条二坊十二坪発掘調査概要報告』1984。市が東半部で実施した調査は未報告であるが、遺構の概要については資料を提供していただいた。
8) 集成は以下の報告。奈文研『平城京左京三条二坊十三坪の発掘調査』1981
9) 集成は以下の報告。奈文研『昭和62年度平城宮概報』1988, pp.63～75
10) 1984年度の集成は以下の報告。奈文研『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告』1985
11) 奈良市教委『昭和62年度奈良市埋文報』1988, p48(市第133次), 奈文研『1991年度平城概報』1992, pp.80～82 (第223－20次)
12) 奈文研が3次(第151－1次, 第156－6次, 第174－12次)にわたって調査した。集成は以下の報告。奈文研『平城京左京四条二坊一坪』1987

平城京内の調査で回廊を伴う例は、上述した二条坊十二坪と今回調査した二条二坊五坪および四条二坊一坪とで3例が判明したことになる。四条二坊一坪の奈良時代後半の居住者については、天平16年（744）に写一切経長官、のち造東大寺司長官となる市原王を候補の一人と考えている。

調査地の西隣、三条一坊の十・十五・十六坪の調査[1]では、十五・十六坪の南北2町を一体と利用すること、南半の中央に東西棟を3棟、その左右に南北棟を配置し、のち掘立柱から礎石建物に改めていることを摑むとともに、出土瓦の多くが平城宮所用瓦と同笵であることなどから、公的施設あるいは宮外官衙と推定している。三条一坊の他の坪については、小規模な調査が多く坪内の様相がよくわからないが、七[2]・十四坪[3]は1町を占有し、後者は大学寮の可能性が指摘されている。

詳細は後の章で詳述するが、今回の調査によって、三条二坊一・二・七・八坪は、奈良時代前半には4町を占有する左大臣の長屋王邸であり、のち皇后宮となった可能性が高いこと、二条二坊五坪は奈良時代前半には1町もしくはそれ以上を占有する従三位・兵部卿の藤原麻呂邸である可能性が高いことなどが判明し、平城宮に近接した地域に高官の邸宅や公的施設が設けられた状況がより一層明らかになったといえる。

平安時代以降

都は延暦3年（784）に長岡京、さらに延暦3年（794）には平安京に移る。その後、大同4年（809）～天長元年（824）には平城上皇の宮が平城宮に営まれているが、『日本後紀』は天長元年の平城天皇崩御後ほどなく、平城宮を含めて「平城旧京の都城道路変じて田畝」となっていたことを録す[4]。このことは、京内、とくに北半の処々から9世紀前半（平安時代初頭）の遺構・遺物が発見されるのに対して、9世紀後半以降の遺構・遺物が稀であることとほぼ符合する[5]。

今回の調査地周辺でみると、奈良時代末頃の遺構が平安時代初頭まで存続する場合が多いが、左京二条二坊十三坪[6]、同三条二坊十五坪[7]では平安時代初頭になって新たに建物が建てられている。前者の二条二坊十三坪では9世紀後半頃と、10世紀前半頃の建物群もあり、出土瓦からみて法華寺阿弥陀浄土院（左京二条二坊一坪）とのつながりが示唆されている。この東の二条三坊三・六坪[8]では、平安時代から鎌倉時代の遺物が出土し、中世の建物も検出している。さらにこの東の二条四坊二坪においては平安時代後半から鎌倉時代の興福寺佐保田庄と推測する建物・井戸を検出[9]しており、二条三坊三・六坪の建物もそうした庄園経営に関わるものであったのかもしれない。いずれにしても、9世紀後半には平城京の北半の地も急速に水田化していったと考えられる。

1）奈文研『1992年度平城宮概報』1993，pp.57～66（第230次），p.73（第234－9次）。他の調査については，奈文研『昭和54年度平城宮概報』1980，p.25・26（第118－8次），奈良市教委『昭和60年度奈良市埋文報』1986，pp.6・7。

2）奈文研『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1991

3）奈文研『年報1972』p.39，奈文研『平城京左京三条一坊十五坪発掘調査報告』1995

4）貞観6年（864）11月7日条。奈文研『平城宮報告XIV』1993，巻末年表を参照。

5）こうした見解は以下の報告が初出。奈文研『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1975，p.49

6）註4）に同じ。

7）奈文研『平城京左京三条二坊』1975，p.49

8）奈文究『昭和59年度平城概報』1985，pp.42・43（第156－18次），pp.44・45（第156－22次）

9）奈良市教委『昭和63年度奈良市埋文報』1989，pp.33～37（市第157次）

B　地区割と測量

そごうデパート建設に伴う発掘調査は、1986年9月から1989年9月までの3ヵ年にわたって実施し、調査範囲が南北330m、東西230mの地域に及んだ。一方、左京三条二坊一坪西北隅部は、平城宮跡第32次調査として、1965年に調査を行った。平城宮・京の地区割と測量基準は、1989年4月以降は現行の地区割と測量基準に統一したが、それ以前は水田の地割をもとにしており、広い範囲での統一性を有していなかった。しかも、今回の一連の調査が統一基準に移行する過渡期にあたっていたため、今回の調査区内には旧地区割と新地区割が存在し、さらに移行期における中間的措置ともいえる暫定地区割もあり、複雑な様相を呈している。

地区割　地区割と各調査区の関係はFig. 3、各中地区の基準座標値はTab. 2の通りである。

旧地区割

旧基準に基づく地区割を用いているのは、近鉄線路南側の地域である。今回の調査区の大半が含まれ、6AFI－R・S・T・Uの4中地区に分れる。ただし、一坪西北隅部は平城宮跡第32次調査として発掘しており、この部分は平城宮内における従来の地区割にもとづいている。すなわち、平城宮局地座標と平城方位（国土座標系に対して北で西に0度7分47秒振れる）を用い、水田1枚ごとに中地区が異なるものであり、6AAI－L地区となっている。

暫定地区割

暫定地区割を用いたのは第198次－A・B調査区である。

新地区割

新地区割によっているのは、近鉄線路北側の調査区のうち、1989年4月以降に行った第202－13次、第204次、第223－13次調査区である。

結局、今回の調査を含む周辺の地区割は、第32次調査を別としてすべて国土座標を用い、かつ国土方位によっている点は共通するが、3種類の異なる基準グリッドを採用しているために近接する調査区であっても新・旧・暫定地区割の調査区の間には3mグリッドに整合性がない。

写真測量

測量　遺構の平面および高さの実測は、原則として航空写真測量で行った。

航空写真の撮影は、各調査について1回を原則としたが、第186次、第197次、第198次－B区、第204次調査については上層遺構と下層遺構に分けて2回撮影し、これらをあわせて全体では19回の空撮を行った。各撮影の日時等は別表6の通りである。ヘリコプターに登載した航空測量用カメラ（ツアイス社製RMK－A）を用い、縮尺1／300～1／800の垂直写真を撮影した。用いたカメラの焦点距離は約150mmであるから、縮尺1／300の写真を撮影するためには遺構面からの撮影高度は150mm×300＝45mとなる。撮影フィルムはモノクロとカラーの2種としたが、早い時期の調査である第178次、第184次、第186次－北の3調査区につては、カラー撮影が徹底できず、モノクロのみの撮影となってしまった。

図化縮尺

図化は縮尺1／300の写真から縮尺1／50の平面図を作成した。図化機は従来型のアナログタイプである(WILD－A7)。写真測量による実測図は校正を正確に行わないと有効な図とならないが、今回の一連の校正は各担当者が写真、遺構カード、調査日誌を用いて行った。重複する遺構の前後関係が撮影後の断ち割り調査で逆転する場合がある。こうした場合は調査の最終的な知見にもとづいて修正を加えた。

また、小面積の調査区、航空写真撮影後の補足調査で見つかった遺構、写真撮影が不可能な近鉄線路下の第198次－C調査区などの実測は、遣り方測量、またはトータルステーションを用いた直接測量による手測りで行った。いずれの場合も測量基準はすべて国土座標(第Ⅵ系)である。

中地区名	Aライン(X)	10ライン(Y)	調　査　次　数
旧地区割			
6 AFI－R	－146,267.5	－17,797.5	103－1、112－3、118－15・23、141－35、178、193－A・D
6 AFI－S	－146,207.5	－17,797.5	103－1、112－3、184、186－西・西II・補足、190、193－A・D
6 AFI－T	－146,144.5	－17,797.5	186－西II・補足・北・北II、190、193－B・E・F、195－南・北、197
6 AFI－U	－146,084.5	－17,797.5	193－B・B補足・C、197、200・同補足
暫定地区割			
6 AFF－J	－146,025.0	－17,799.0	198－A・B
6 AFF－K	－145,965.0	－17,799.0	198－B
新地区割			
6 AFF－J	－145,019.0	－17,790.0	202－13、204
6 AFF－K	－145,959.0	－17,790.0	204、223－13

＊第198次－C地区は旧地区割で行うべく地区杭を設定したが、設定作業に錯誤があった。同地区は6AFI－U中地区であり、本来ならばそのUT10の座標値はX＝－146,027.5Y＝－17,797.5であるべきなのがX＝－146,028.0Y＝－17,798.5となってしまっている。
＊第123－26次調査は地区杭を打たずに行った。

Tab.2　調査次数と中地区との関係

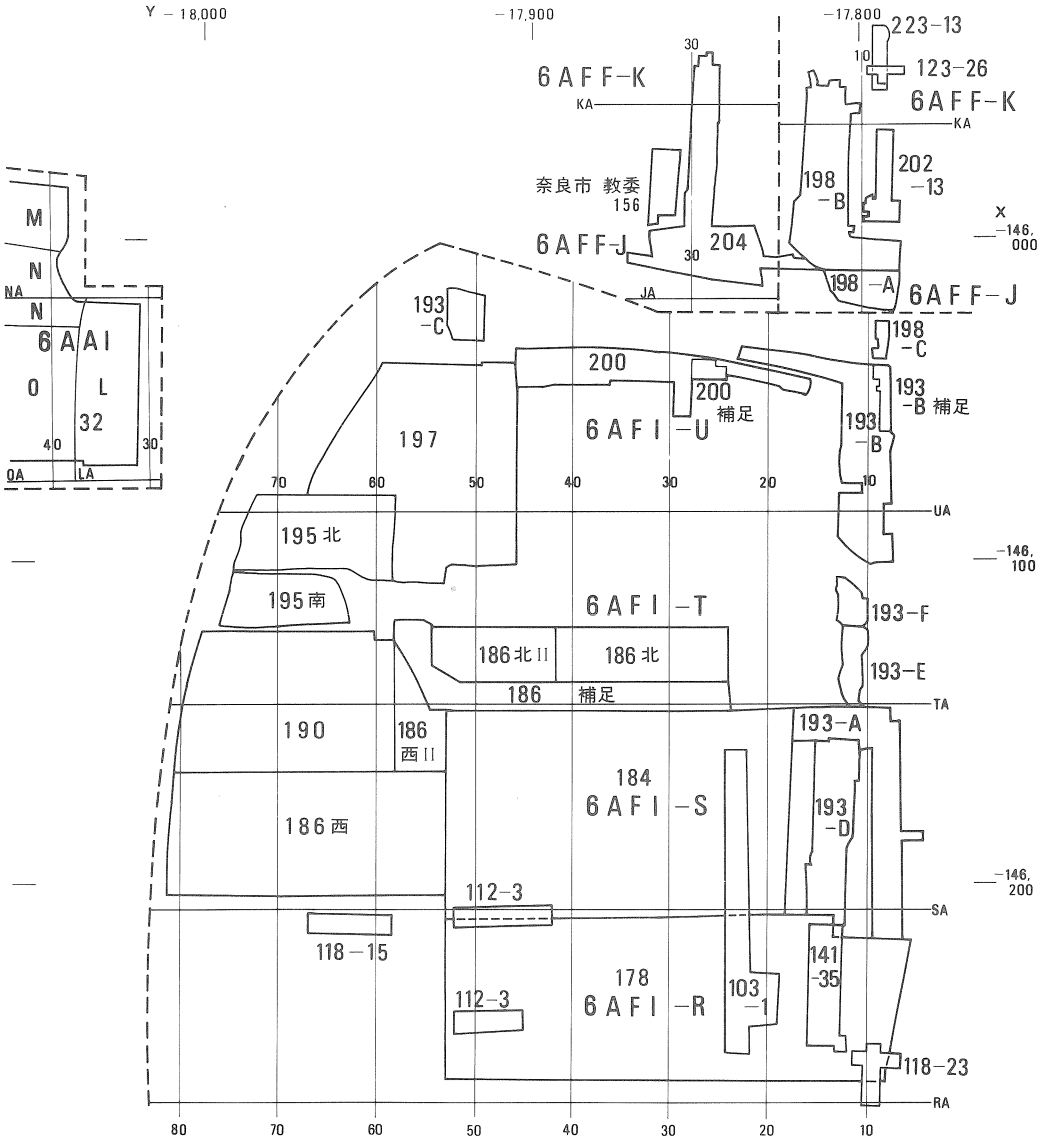


Fig.3　地区割図

3　調査の概要

今回の調査は、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪と同二条二坊五坪の約32,000㎡を対象として、約3年間、10次24回にわたって実施した。主な遺構は建物237棟、塀86条、井戸41基、道路8条などであり、遺物も木簡、瓦塼、土器、木製品など厖大な量が出土した。平城京ではこれまで例をみない大規模な発掘であり、しかも歴史上の人物である長屋王や藤原麻呂の生活再現につながる稀有の成果をもたらしたことは、以下の各章に詳述する通りである。

本節では、そうした発見に至る経過をたどりつつ、各次数ごとに調査の概要を述べることにする。あわせて、当該地域において1965年度および1977年度から1982年度、さらには1989・1991年度に奈良国立文化財研究所が実施した調査の概要も付載しておく[1)]。調査の進行状況や各遺構については、次節の調査日誌や遺構略図(Fig. 4～14)を参照されたい。なお、1988年度に奈良市が第156次として実施した調査の概要も付載しておく。

A　第178次調査　付　第103－1・112－3・118－23・141－35次調査

左京三条二坊の南半部（6AFI－R区）の調査である。この地区は、第178次調査を行う以前に、東辺部を第103－1次、第118－23次、第141－35次として、西辺部を第112－3次として調査していた。

第103－1次調査（南半）では、掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条、旧河川SD4150などを検出し、奈良時代に2時期以上の変遷があることを摑んだ。その後、第178次調査によって、塀は建物になることや、SD4150は旧河川を掘り直したことなどが判明した。　既応の調査

第118－23次調査では東二坊々間路西側溝SD4699の南端部を発掘した。8世紀前半の遺物が主であり、西側溝が比較的早い段階に埋められたのではないかという問題提起となった。

第141－35次調査は第103－1次と第118－23次とのほぼ中間地点で実施した。小規模な掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条、井戸2基やSD4150を検出し、奈良時代当初から平安時代初め頃にかけて4時期以上の変遷があることを摑んだ。

第112－3次調査では北と南に調査区を設け、掘立柱建物9棟と二・七坪間の坪境小路SF4230の両側溝を検出し、奈良時代当初から平安時代初め頃まで4時期以上の変遷があることを摑んだ。また、施釉陶器や平城宮と同笵の軒瓦を出土することから、当地が高級な宅地であると推定した。坪境小路は奈良時代当初から存在したとみたが、路面上の穴が第178次調査によってSB4490の柱穴となって小路を横切ることが判明し、敷地や建物規模について考えて改めることになった。

第178次調査では、以上の諸調査区も再発掘し、全体として掘立柱建物58棟、掘立柱塀28条、井戸14基、東二坊々間路1条、道路3条などを検出した。

1）第32次調査の概要は、奈文研『年報1966』pp.36～39。他の調査の概要は、各年度の奈文研『平城宮概報』に収録している。奈良市第156次調査概要は、奈良市教委『昭和63年度奈良市埋文報』1989, p.27。

7時期区分　この調査では、遺構は奈良時代当初から平安時代初め頃まで7時期（A～G期[1]）の変遷をたどること、東二坊々間路SF4700については西側溝SD4699が奈良時代当初のA期にあること、

2町以上の占地　A～C期の敷地は二・七坪の少なくとも2町（坪）を一体として使用し、西寄りに大型の建物を配置して塀で大きく区画すること、東寄りにはA期から蛇行溝SD4150があるが、早い段階で埋戻されることなどが明らかとなった。塀や建物は作り直しており、調査時点ではA期に塀SA4210・4213・4250・4390、建物SB4207・4235・4251、B期にSA4182・4206・4389、SB4255・4270、C期にSA4180・4181・4288、SB4285などを比定した。ただし、本報告では建物の時期比定を一部改めている。

D期とF・G期については、二・七坪間にそれぞれ道路SF4230と両側溝SD4229・4231を設けて別々に使用していること、D期には七坪が道路SF4290で南と北に分割されること、E期はD期とF期の間にあってSF4230の位置に建物があることから2町以上の占地になり、大型建物（SB4100・4201・4220・4240・4269）を整然と配置することなどが判明した。

年代比定　各期の年代は、出土遺物から、A・B期を奈良時代前半、C・D期を奈良時代中頃、E期を奈良時代後半、F・G期を奈良時代末頃から平安時代初め頃とした。調査の進展によって年代はより限定されることになるが、基本的にはこの7時期区分が以後も踏襲されることになった。

遺物は、東二坊々間路西側溝SD4699、蛇行溝SD4150、二・七坪間の道路側溝、井戸や土坑などから、木簡、軒瓦、形象硯、水滴、二彩・緑釉陶器、墨書土器、漆付着土器、土馬、漆器、曲物、斎串、人形、刀形、儀仗用弓、銭貨（和同開珎）、銅鈴、素文小鏡などが出土した。

B　第184次調査　付　第103－1次調査北半

第178次調査区の北で実施した調査であり、三条二坊七坪の北半部（6AFI－S区）にあたる。東寄りの部分は第103－1次（北半）として過去に調査し、掘立柱建物9棟、掘立柱塀2条などを検出していた。

第184次調査では、第103－1次調査区も再発掘し、全体として掘立柱建物67棟、掘立柱塀23条、井戸10基、坪境小路4条などを検出し、7時期に区分した。

大きな成果としては、第178次調査で検出したA～C期の西半の区画塀が八坪に及ぶことから、少なくとも3町を一体として使用したことが判明し、

中核の建物　区画塀内の中核的な建物群も明らかとなった。調査時点では、A期には区画塀SA4480の西に、一部を検出した正殿SB4500と長大な脇殿SB4480・4490を配置し、B・C期には区画塀の東辺部を作り直して双堂SB5300・5301やSB4430・4400など大型建物を配置すると考えた。本報告ではB・C期の建物や塀については考えを改めている。

敷地の分割　D期とF・G期については、二・七坪間だけでなく、七・八坪間においても新旧2時期の道路側溝SD4359A・B、SD4361A・Bを検出したことから、各坪が個別の敷地として使用されたことが確定した。七坪は、D期には第178次調査で検出した道路SF4290で北と南に分割され

1）調査時点では、平城宮造営以前をA期、奈良時代～平安時代初め頃までをB1・B2・B3・C・D・E1・E2期とした。第178次調査以後は後者をA1・A2・A3・B・C・D1・D2期、『長屋王概報』では最後の2時期を一括しA～F期とした。本報告では奈良時代以降をA～G期としており、調査概要もこれに置き換えた。

たことがわかっていたが、第184次調査ではD期のSD4359Aと接続する南北溝SD4165を検出し、東と西にも分割されていたことがわかった。建物は概して小規模であり、E期の建物も認めたが、E期の敷地が八坪にまで及んでいたとする確証は摑めなかった。

なお、調査終了近くの断割り調査によって、奈良時代の整地土下に幅3～7mの東西大溝(SD4411・4412）があることがわかった。本報告では、各次調査の土層図や遺構図それに航空写真を検討し、この溝が東西両端で北に折曲がって方形に区画するらしいことを摑み、7世紀頃の居館を囲む濠と推定している。

7世紀頃の居館

各期の年代については第178次とほぼ同じ見解だが、坪境小路や柱の抜取り穴から出土した土器によって、D期の開始を恭仁宮から還都した天平17年（745）頃と限定できた。

D期の上限

遺物は坪境小路側溝や井戸などから、多量の土器や瓦が出土した。三彩丸瓦、三彩・二彩・灰釉陶器、硯、土馬、墨書土器、斎串、銭貨などもある。井戸SE4366から木簡と伴出した、猿を描いた土器は他に例をみない資料であり、美術史上貴重な発見となった。井戸SE4365では掘形から祭祀にかかわる斎串や素文鏡が出土。七・八坪間の坪境小路上では土坑SX4355から100枚近くの和同開珎が「緡銭(びんせん)」(差し銭）の状態で出土した。これらも稀な発見であった。

C　第186次（北・北II区、補足）調査

第184次調査区の北で実施した調査であり、三条二坊八坪の南辺部（6AFI－S・T区）にあたる。北側の東半を第186次北区、北側の西半を第186次北II区、これらの南の市道部分を第186次補足調査として実施した。

主な遺構は、掘立柱建物26棟、掘立柱塀16条、井戸3基、坪境小路1条などであり、7時期に区分した。

調査面積は小さいが、結果として多大の成果を得た。まず、A～C期の敷地西半を占める区画塀の北限を摑み、敷地が二・七・八坪だけでなく一坪にも及ぶことが確定した。さらに、井戸SE4770から「長屋皇宮」や「養老元年」木簡が出土したことから、A・B期の遺構は長屋王邸である可能性が高いこと、A期には一坪部分が南北塀SA4870と東西塀SA4880によって区画されていたことなどもわかった。調査時点では八坪部分がB期になって南北塀SA4780と東西塀SA4790で区画されるとみたが、本報告ではSA4780はB期であり、C期になってSA4180とSA4790が八坪部分を区画したと改めている。

4町占地と確定

長屋王邸と推定

D期以降については、調査面積が狭いこともあって判然としなかったが、本報告ではD期およびF・G期には八坪が細分され、E期には一・二坪及び七・八坪の坪境小路に近接してSB4825・4855があることから、再び4町を一体として使用したと判断している。

各期の年代については、井戸SE4770から平城宮出土土器編年I・II期の土器や養老元年（717）の紀年木簡とともに、「長屋皇宮」木簡が出土したことから、B期の下限が長屋王の没年である天平元年（729）になるという見方が強まった。

B期の下限

遺物は坪境小路や井戸などから、木簡や瓦塼、土器、木製品が出土したが、量はそれ程多くない。SE4770の出土遺物は既述したように養老元年頃を下限とする基準資料となったこと、SE4760から天平勝宝7年と墨書した桧扇が出土したことなどが注目される。

D　第186次（西・西II区）調査　付　第118－15次調査

第184次調査区の西で実施した調査であり、三条二坊二坪（6AFI－S・T区）にあたる。南を第186次西区、この北東部を西II区として調査した。第186次西区の南は、過去に第118－15次として調査し、大型建物SB4550・4775とこれより新しい南北溝SD4584を検出していた。

第186次西・西II区で検出した主な遺構は、掘立柱建物26棟、掘立柱塀13条、井戸3基、坪境小路1条などである。

A～C期の正殿

これらの調査では、A・B期の長屋王邸正殿と推測されるSB4500が床面積約360m²と京内最大であること、SB4500の西にも大型建物SB4651・4670があり、正殿域とは南北塀SA4610で画していることが判明した。調査時点ではこれらの建物はC期まで存続するとみたが、本報告ではSB4600がC期の正殿であり、この西の建物群も建て替えられたと判断している。

D期とF・G期には、一・二坪間に坪境小路SF4590があり、各坪を別個に使用していたと調査時点では考えた。だが、小路両側溝SD4589・4591とも2時期と明瞭には区分できないこと、二坪の東面築地西雨落溝とみるSD5258が小路側溝より古いことから、D期には一・二坪が一体であり、F期になって一坪と二坪に分割されたと本報告では改めた。D期では二坪の東寄りに主殿SB4550と後殿SB4551・4581が配置される。F期でも二坪の東寄りに主殿SB4570と脇殿SB4565があり、1坪全体を分割して使用していた様子はない。なお、E期には、東寄りに大型建物SB4566・4574が東西に並び、西寄りにも建物があることがわかった。

遺物は調査区全域から多量の土器・瓦が出土した。木簡は井戸SE4580・4655から数点出土したにとどまる。SE4580の埋土から合計38枚の和同開珎、神功開宝、萬年通宝、斎串、ウマの骨、SB4631の柱抜取り穴から口径45cmの大型漆器鉢、坪境小路上の土坑SX4545から小型素文鏡、奈良時代の整地下で旧石器の可能性がある石片などが出土したことが特筆できる。

E　第190次調査

第186次西区の北で実施した調査であり、三条二坊二坪北辺部と一坪の南辺部（6AFI－S・T区）にあたる。

主な遺構は、掘立柱建物14棟、掘立柱塀6条、井戸1基、坪境小路1条、橋1基などである。

成果としては、A～C期における中央部区画（内郭）の北限塀SA4880・4890とこれに接続する南北塀SA4610を発掘し、正殿とその西の区画が当初から分けられていたこと、この時期のSA4880・4890以北（西外郭）には内部を細かく仕切った長大な建物SB4800があり、他の区画と異なって事務管理的な性格をもつことなどを摑んだ。SB4800と重なる長大な建物SB4810については、調査時点ではE期とみたが、本報告ではC期にSB4800を建て替えたと判断している。

A～C期の事務的区画

D期とF・G期には、この時点でも一・二坪間に坪境小路SF4590があり各坪を別個に使用していたと考えたが、既述したようにD期には一・二坪は一体であり、小路はF期からと本報告では判断している。小路両側溝SD4589・4591には木樋暗渠があり、一坪と二坪は築地が区画していたこと、一坪の南辺に狭長な建物SB4900・4920があり、これに伴う井戸SE4885の埋

土から出土した「地子米」の木簡によって太政官厨に関わる可能性の高いことなどがわかった。　太政官厨か
E期については、東西塀SA4881があり、のち第195次北区の調査で南北塀とL字状に連結して二坪部分とを区切っていることが判明したが、調査時点ではその性格を摑むまでには至らなかった。

遺物では、北側溝SD4591に焼土、炭、鉄滓、鞴の羽口などが一括投棄されていたことが注目される。

F　193次（A・D区）調査

第178・184次調査区の東で実施した調査であり、三条二坊七坪の東辺と東二坊々間路（6AFI－R・S区）にあたる。

主な遺構は、掘立柱建物13棟、掘立柱塀2条、東二坊々間路と坪境小路各1条などである。

成果としては、A期には敷地東限を掘立柱塀SA4199で画すこと、この時期には東二坊々間路西側溝SD4699があり、これから敷地内の蛇行溝SD4150へ導水していること、東二坊々間路西側溝はのちに埋戻し、F・G期には七・八坪間の坪境小路両側溝は東二坊々間路を越えて東側溝に注ぐことなどが判明した。

調査時点ではB期にはSD4150を埋め戻し、敷地の東限を築地に改め中央に門を開くと考えたが、本報告ではC期に改めた。また、東二坊々間路西側溝を埋め戻した時期をD期とみたが、第193次B区の調査結果を勘案してE期と判断した。　東門の発見　東二坊々間路西側溝の廃絶時期

遺物は東二坊々間路西側溝、七・八坪間の坪境小路両側溝、井戸などから多量の土器、瓦、木製品などが出土した。とくに二坊々間路西側溝SD4699から出土した養老6年から天平3年までの木簡、平城宮II・IIIを主とする土器、斎串、人形、マリオネット、木櫛、サイコロなど多種多彩な木製品、小型素文鏡などが注目される。

G　第193次（B・C・E・F区、B区補足）調査

第193次A・D区の北で実施した調査であり、三条二坊八坪の東辺と東二坊々間路および北辺と二条大路（6AFI－T・U区）にあたる。C区はB区の西方、二条大路上に設けた調査区（6AFI－U区）であるが、顕著な遺構はなかった。

検出した主な遺構は、掘立柱建物8棟、掘立柱塀2条、井戸3基、二条大路と東二坊々間路各1条、溝状土坑2条などである。

成果の第1は、E・F区の溝状土坑SD4750から厖大な量の「長屋王家木簡」を発掘し、A・B期の遺構が長屋王邸と確定できたことである。第2は、B区の溝状の遺構SD5100を発掘し、C期には二条大路に濠状の施設があったと判明したことである。第3は、B区で木樋暗渠SX5351・5352を検出し、東限の塀SA4199を築地SA4195に改めていること、東二坊々間路西側溝SD4699はE期に埋め戻され、F・G期には二条大路南側溝は東側溝に注ぐと判明したことである。建物は大型のSB5200・5201があり、その時期を調査時点ではB・C期としたが、本報告ではC期の可能性が高いと考えている。なお、B区では方位が大きく振れる古墳時代（5世紀後半）の掘立柱建物SB5203や斜行溝SD5230をはじめて発見した。SD5230は幅約3m、深　長屋王邸の確定　南濠状遺構の発見

さ約0.4mであるが、北東部で途切れることから濠の可能性を考えた。本報告では、1990年度にこの東方で実施した第215－3次調査においてSD5230とほぼ直交する同時期の濠状遺構[1]と関連づけ、居館を方形に区画する濠と推定している。

古墳時代の居館

遺物は、溝状土坑SD4750、濠状遺構SD5100、二坊々間路西側溝SD4699などから、木簡、土器、瓦、木製品が多量に出土した。SD4750の木簡は約35,000点あり、長屋王の家政に関わる豊富な情報をもたらした。また、紀年木簡は霊亀2年（716）を下限とし、伴出した土器（平城宮土器Ⅰ・Ⅱ）、瓦、木製品は編年上の基準資料となった。巻物を入れたと推定できる刳り抜き木箱や京内2例の木履の発見はとくに注目される。SD5100では神亀2年（725）の墨書土器や天平10年を下限とする木簡が出土した。「皇后宮」など公的な施設に関わるものがあり、C期の遺構の性格を考える上で重要な資料となった。

H　第195次（北・南区）調査

第190次調査区の北で実施した調査であり、三条二坊一坪の中央部（6AFI－T・U区）にあたる。主な遺構は、掘立柱建物16棟、掘立柱塀2条、井戸3基などである。

この調査では一坪部分における各時期の遺構の様相が明らかになった。A期には大型の建物SB5150やSB5020があること、E期には南北塀SA5190と第190次で検出した東西塀SA4881とがL字状に連結して一坪部分の東半を仕切り、この内側に建物を計画的に配置すること、F期にはSB5000が主殿になるらしいことなどがその成果である。

遺物は全域から土器や瓦が多量に出土した。井戸SE5140から宝亀7年（776）の紀年木簡や平城宮土器編年Ⅴ期の土器群と伴出した「官厨」の墨書土器は、F期の遺構が太政官厨に関わるという第190次調査の推測を補強するものとなった。

I　第197次調査　付　第32次調査

第197次調査区は、第195次調査区の東および北に接して設けた調査区であり、三条二坊一坪北東部から八坪北西部および二条大路（6AFI－T・U区）にあたる。

この調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物22棟、掘立柱塀7条、井戸5基、大路1条、坪境小路1条、濠状遺構1条などであり、7時期に区分した。

北門の発見

成果の第1は、A期には北面築地中央に、二条大路に面して掘立柱の門SB5090が開くことを明らかにした点である。大路に門を開くことができるのは『続日本紀』天平3年9月2日条に「三位以上」とあり、A・B期の遺構が長屋王邸とする確証の一つになった。また、門の南には2条の南北塀SA4870・4961と建物SB4960があり、この間が北門に至る通路となること、のちSA4961はSA4860に建て替えるが、通路はC期まで残り、敷地北半が東と西に大きく区画されることも判明した。成果の第2は、二条大路上の濠状遺構SD5100が北門近くまで至っていることを確認したことである。埋没した時期はC期であるが、開削がいつまで遡るかは、この時点ではわからなかった。

1）奈文研『1990年度平城宮概報』1991，pp.92・93

建物については、A期には第195次北区で検出したSB5020の北にSB5040があり、両者は塀でつながれていることがわかった。A期からC期まで大きな建て替えはない。D期とF・G期には一・八坪間に坪境小路SF4910が設けられ各坪が別個に使用されること、F期には主殿SB5000とその東に狭長なSB4871があることなどが判明した。第190次調査の成果とあわせると、F期には一坪の東辺と南辺には細長い建物3棟が配置されたことになる。

遺物でとくに注目されるのは、濠状遺構SD5100の出土品である。木簡の紀年が天平3年から天平10年に限られ、多量に出土した土器や瓦の年代もほぼこの時期にあたることから、編年上の標準資料となった。また、木簡の記載に天皇家と関わる「贄」「幸行」などがあることから、C期の遺構が天皇家を含め公的な施設であったという見方を強めることになった。なお、二条大路南側溝では築地から落下した状態で瓦を検出したが、軒瓦を含まない点が注目された。　築地落下瓦

第32次調査は、平城宮東南隅と、二条大路と東一坊大路の交叉点および三条二坊一坪東北部（6AAI－L区）などで実施した学術調査である。成果としては、二条大路の北・南側溝は東一坊大路の東・西側溝に合流して南流すること、二条大路と東一坊大路の交叉点には橋SX3920・4020が架けられていること、三条二坊一坪は築地で画し、この坪の北西隅には時期を異にする比較的大型の建物SB3870とSB3871があること、一坪の北の二条大路上には掘立柱建物SB3907があることなどが判明した。SB3907については、柱穴から奈良時代中頃の遺物が出土しており、本報告では第200次の調査結果も勘案してC期に廃絶したと判断している。

J　第198次（A～C区）調査　付　第123－26・202－13・223－13次調査

左京二条二坊五坪の東辺と、二条大路上、東二坊々間路上で実施した調査（6AFI－U区、6AFF－J・K区）である。二条大路上を第198次A区、この北を第198次B区、南を第198次C区として調査した。第123－26・202－13・223－13次調査区（6AFI－J・K区）は第193次A区の北で実施した。

第198次調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物7棟、回廊1条、築地1条、二条大路1条、東二坊々間路1条、橋1基などである。

成果としては、左京二条二坊五坪において京内最長の建物SB5250を発見し、この地が一般の宅地ではなかったこと、二条大路SF5110上には南肩のSD5100と対応して北肩にも濠状遺構SD5300があり、遺物からみても両者が共通する性格をもつことを摑んだ。五坪内の遺構については、調査区内では少なくとも4時期の変遷があり、大規模なSB5250やのち第204次調査で回廊と判明するSC5290が奈良時代後半になること、二条大路北側溝SD5240と二坊々間路西側溝SD4699・5021は大きくは3回の改修があり、奈良時代前半頃と末頃にはSD5284はSD5021と合流して東流するが、この間の時期にはSD5240は二坊々間路西側溝SD4699・5021と連結して南流し、早い段階には濠状遺構SD5300が併存することなどが判明した。　京内最長の建物　北濠状遺構の発見

遺物で注目されるのは、SD5300の出土品である。神亀5～天平8年の紀年木簡があり、伴出した土器や瓦もほぼこの時期になることから、南のSD5100と同じ時期（C期）の基準資料となった。開削時期については、調査時点では明確でなかったが、本報告ではSD5300に先行する二条大路北側溝SD5240下層の土器が平城宮III古であることから、長屋王沒年の神亀6年

濠状遺構の上限

(729) 以後（五坪におけるｃ期）とし、SD5100も同じ頃（Ｃ期）と判断している。SD5300の木製品は豊富であり、墨書土器などもある。他では、SD5248から平城京では初出の瑞雲双鸞八花鏡や、五坪の南面築地に沿って落下した多量の瓦が出土したことなどが注目される。

第123－26次と第223－13次調査では主に東二坊々間路西側溝SD5021を発掘した。この南の第202－13次調査では、SD5021が奈良時代を通じて存続したこと、五坪の東面は築地で画しその西には３時期にわたる雨落溝を設けていること、奈良時代後半以前には西側溝から五坪に導水した水樋SX5034があり、西雨落溝に設けたＳＸ5035に連結していることなどが判明した。SX5034・5035を設けた時期は、その後出土遺物から、奈良時代後半と判明している。

SD5021からは木簡をはじめ土器、瓦、木製品などが多量に出土した。木簡は和銅８年から宝亀４年と長期にわたる。奈良時代前半とみられる下層から、「左太臣」の木簡や、畿内から計帳歴名が京進されたことを示す木簡が出ていることが注目される。他には三彩平瓦、緑釉熨斗瓦、「坏女」「菓」の墨書土器、各種の硯などが出土した。

Ｋ　第200次(同補足)調査

第193次Ｂ区と第197次調査区で両端を検出した、濠状遺構SD5100の中間部分を発掘するために実施した調査であり、三条二坊八坪の北辺と二条大路（６AFI－U区）にあたる。工事の都合上、一部をのち補足調査した。検出した主な遺構は濠状遺構SD5100のほか、二条大路SF5110と南側溝SD5105、七坪の北面築地SA5095の南雨落溝SD5094、掘立柱建物SB51201棟と南北塀SA41801条などである。

成果としては、七坪の北面築地と南雨落溝及び二条大路南側溝がほぼ奈良時代を通じて存続すること、濠状遺構SD5100は第193次Ｂ区と第197次調査の成果とをあわせて全長が120mに及ぶこと、Ｃ期の南北塀SA4180は北面築地SA5095に取り付き、七坪部分を東西に２分することなどが判明した。二条大路上の掘立柱建物SB5120は時期が明らかでなかったが、第204次調査でこの真北に五坪の南門SB5315が存在することが判明したため、本報告では時期をＣ期とし、警護に関わる建物と推定している。

警護に関係する建物

調査の主眼であったSD5100からは、木簡、土器、瓦、木製品など多量の遺物が出土した。第193次Ｂ区及び第197次の遺物を含めると、紀年木簡は神亀２年（725）から天平11年（739）まであるが、特に天平７・８年に集中すること、土器や瓦もほぼこの時期になることなどから、恭仁京に都を移す以前に埋没したとわかった。他には墨書・墨画土器、木製曲物、漆器、漆沙冠、銅製人形、金属製刀装具や馬具などがあり、当時の生活を復原する格好の資料となった。また、蓮実や栗をはじめとする種々の種子があること、花粉分析によってはじめてベニバナがあったことやSD5100は比較的短い期間には埋め戻されていることなどが判明した。

Ｌ　第204次調査　付　奈良市第156次調査

第204次調査は第198次Ｂ区の西で実施した調査であり、二条二坊五坪のほぼ中央部と二条大路（６AFF－J・K区）にあたる。

この調査で検出した主な遺構は、掘立柱と礎石建ちの門計４棟、掘立柱建物10棟、掘立柱回廊１条、築地１条、井戸１基、二条大路１条、橋１基などである。第198次Ｂ区の調査成果とあわせて、遺構は奈良時代を通じてａ～ｇの７時期に区分した。[1)]　７時期区分

成果としては、五坪の南面中央に二条大路に面して南門が開き、建物も大型で整然と配置していることから、ほぼ全期間を通じて１町もしくはそれ以上を占有したこと、濠状遺構は門の東（SD5300）だけでなく西にもSD5310があること、これらから出土した聖武天皇の吉野行幸に関わる木簡や「兵部省卿宅政所」の木簡、「兵部卿宅」の墨書土器が南門から投棄されたと推定でき、ｃ期の遺構が兵部卿であった藤原麻呂の邸宅であろうことなどを摑んだ。　南門の発見　藤原麻呂邸と推定

南門は４時期の重複があり、掘立柱の棟門SB5313A→礎石建ちの棟門SB5313B→礎石建ちの４脚門SB5320→礎石建ちの棟門SB5325に変遷する。SB5320の南では二条大路北側溝が矩折れになり、この溝が濠状遺構より新しいことなどからｄ期になることがわかった。SB5315はc期もしくはそれ以前、SB5325はg期に比定したが、本報告では建物や井戸の配置などからSB5325をf期とし、g期には門がなかったと判断している。また、SB5315BをＣ期、SB5315ＡをＢ期に比定している。

五坪内の建物は、中軸線上の大型建物SB5390→五坪東半を区切るL字状の塀SA5345・5340→回廊SC5290→中軸線上のSB5385・5386への変遷が明らかで、各々をｄ～ｇ期に比定した。また、第198次Ｂ区の建物についても触れ、京内最長のSB5250をｃ期、大型建物SB5260をｇ期とした。本報告では、出土遺物を再検討した結果、SB5250がｆ期になることを明らかにし、上述の時期比定についてはd期をc期、ｅ期をｄ期、ｆ期をｅ期に改めた。

各期の年代については、調査時点ではａ・ｂ期を奈良時代初頭、ｃ期を奈良時代前半～中頃、ｄ期を奈良時代中頃、ｅ・ｆ期が奈良時代後半、ｇ期が奈良時代末頃と推定した。濠状遺構の存在から、ｃ期が三条二坊一・二・七・八坪におけるＣ期とほぼ一致し天平12・13年頃までであることは動かない。ｆ期については、SB5250の礎板の伐採年が年輪年代によって762年と判明し、上限が確定した。柱抜取り穴から出土した土器は平城宮Ⅴがあり、廃絶は奈良時代末頃になる。ｇ期は奈良時代末から平安時代初め頃で、三条二坊一・二・七・八坪のＧ期とほぼ対応すると本報告では考えている。　年代比定

遺物は二条大路北側溝SD5240や濠状遺構SD5300・5310などから、木簡、土器、瓦、木製品などが多量に出土した。とくにSD5300の遺物については、紀年木簡に神亀５年（728）のものがあるが天平７・８年に集中し、土器や瓦もほぼこの時期頃までに納まることから、編年上の基準資料となった。また、木簡は藤原麻呂の家政機関や吉野行幸あるいは警護にあたった衛府の様相を窺いうる貴重な史料となった。木製品は外底に「秦身万歳福」と刻んだ曲物、「大宅里大宍」と墨書した桧扇など豊富で、日本最古の絵馬や楼閣山水図板絵はきわめて稀な発見といえる。瓦については、南面築地にそって落下した状態で検出したこと、南門では新しい時期に6316Ｈ－6663Ｔといった平城宮にはない軒瓦が比較的多く出土したことなどが注目された。　最古の絵馬

なお、奈良市教委が第156次として実施した調査区は、第204次調査区のすぐ西にあたる。主な遺構は掘立柱建物６棟、井戸１基などで、建物は少なくとも３時期あることを明らかにした。

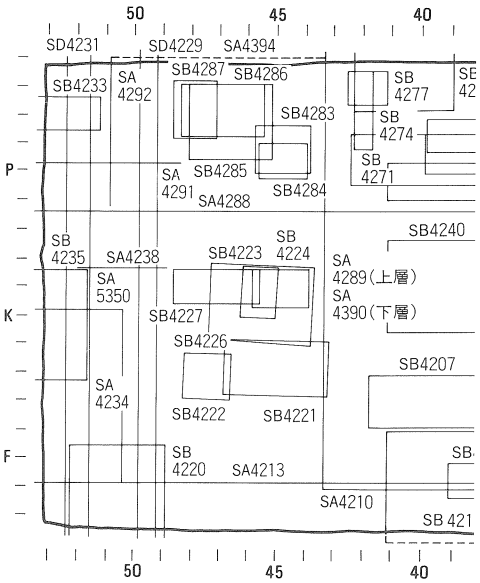
1）『平城宮概報』ではA～G期とするが、『長屋王概報』では三条二坊一・二・七・八坪の時期区分と必ずしも一致しないことからａ～ｇ期とした。本報告も後者に従っている。

4　調査日誌

A　第178次調査

6 AFI区R地区
1986年9月30日～1987年4月30日

9・30　発掘区設定（東西133m、南北50m）。
10・2　重機による盛土・耕土・床土の排除を開始する。
10・24　重機による排土は80％終了。
10・27　調査区の四周に排水溝を掘る。電線埋設とベルトコンベヤー設定。
10・28　調査区西端から発掘開始。遺物包含層（暗灰土）面を出しつつ遺構検出にかかる。南端は堅い砂質の地山面が出る。
10・29　二・七坪間の坪境小路西側溝（SD4231）の西肩が出はじめる。
10・30　坪境小路西側溝の東肩検出。重機による排土は本日終了。
11・4　坪境小路東側溝（SD4229）検出。
11・6　47・48区まで進むがまとまる遺構はない。本日より暗灰色土を掘下げ整地土面で検出することにする。
11・20　39区まで暗灰色土掘下げ。東西溝（SD4163）検出。
11・22　36区まで暗灰色土掘下げ。一部で柱穴（SB4240）を検出するがまとまらない。
11・29　35区まで進む。暗灰色土の下はしまった粘質土（整地土）で検出作業は難渋する。建物や塀（SB4205・4270、SA4181）がまとまりはじめる。
12・1　34区以東の灰褐色土（上層の遺物包含層）掘下げ開始。
12・9　30区まで灰褐色土掘下げ。
12・12　36区から西に折返して本格的な遺構検出にかかる。
12・17　38・39区の検出遺構掘下げ。29区以東の灰褐色土掘下げ。
12・25　東に向け14区まで灰褐色土掘下げ。
1・7　調査班交替。38・39区からの遺構検出を引継ぐ。14区から東は灰褐色土掘下げ。
1・9　38～40区で建物（SB4205・4269・4271・4275）まとまりはじめる。東西溝（SD4262）や井戸（SE4265）を検出。井戸は建物(SB4269)より古い。
1・10　40区で建物SB4269より古い南北溝（SD4266）を検出する。溝内から檜皮や木屑が多く出土する。東方の灰褐土の掘下げは9区まで進む。
1・12　41区から西に一部残る暗灰色土を掘下げて遺構検出。
1・13　41・42区で建物（SB4240）まとまりはじめる。灰褐色土の掘下げは東端まで到達する。東辺では灰褐色土の堆積が深い。折返してさらに灰褐色土を掘下げ、暗灰色土面を出すことにする。
1・14　42区で井戸2基（SE4209・4268）と南北に細長い土坑2基を検出。土坑は井戸（SE4268）より古い。PM42区で土器を多く含む土坑を掘下げる。
1・16　43区で新旧2時期の南北塀（SA4389・4390）とこれらより新しい井戸（SE4276）を検出。
1・17　44ラインに設定した土層観察用の畦の東で小さな柱穴検出する。建物（SB4221・4223・4224・4283）であり、西に延びると推測できる。
1・19　44ラインの畦際で検出した建物は西で



順調にまとまる。45区で新たに柱穴（SB4285）と東西溝（SD4280）を検出。Oラインの柱穴列は東西塀（SA4181）と認識。この塀は南の東西溝（SD4262）より古い。

1・20　第112－3次調査区を再調査する。44ラインの畦際からつづく建物群はほぼまとまった。46・47区で新たに建物（SB4227）を検出する。東方の灰褐色土の掘下げは東から13区付近まで進む。

1・21　47・48区で新たに柱穴（SB4286・4287）検出。

1・22　二・七坪間の坪境小路東側溝に達す。東側溝は上下2層がある。48ラインで南北溝検出（SD4282）。この溝のところで東西溝（SD4280）は止まる。

1・23　坪境小路東側溝（SD4229）上層を掘下げる。この上層より古い建物(SB4220）を発見。東側溝の下層溝は、N区で途切れ、G区以南には残らないことが判明。

1・24　坪境小路東側溝上層より古い建物(SB4220）は、西側溝（SD4231）上層よりも古いと判明。Eラインでこの建物よりも古い東西の柱穴列（SA4213）と、50区で南北塀2条（SA4234・4292）を検出。Oラインの東西塀（SA4288）は坪境小路上でも検出。以上のことから、二・七坪を一体として利用する時期があったことをはじめて認識。

1・26　調査区西端で坪境小路西側溝上層より古い大型の東西棟（SB4235）や小型の東西棟（SB4233）を検出。東からの暗灰色土の掘下げは25区まで進む。

1・27　西から折返し。整地土を一部掘下げて遺構確認を行う。坪境小路西側溝上層を掘下げる。土器多く、青銅製鈴も出土。西端の建物（SB4235）と南端の塀（SA4213）は西側溝下層より古く、南端の建物（SB4220）は下層溝より新しいと判明する。したがって、二・七坪間の坪境にある道路が2時期あり、この間の時期と道路がつくられる前の時期との少なくとも2時期には、二・七坪を一体として使用したことが確認できた。東は18区から西にむけて暗灰色土面を削る。

1・30　坪境小路東側溝（SD4229）下層掘下げ。O・Pラインの東西塀2条（SA4288・4291）が東側溝より古いと判明。

1・31　坪境小路東側溝下層と東西溝（SD4262）が一連と判明。

2・3　10：00まで雪除去。48区の南北溝（SD4282）とO区の東西溝（SD4280）は一連と判明。この付近の建物の先後関係も判明（SB4285→SB4286・4287）。RJ46区の土坑は井戸（SE4225）とわかる。

2・4　48区の南北溝（SD4282）は建物（SB4285）より新しいと判明。RF45の土坑は井戸（SE4217）となる。東からの暗灰色土の削りは33区まで進む。

2・5　44～46区間で建物の先後関係が判明（SB4284・4285→SB4283）。このうちの1棟

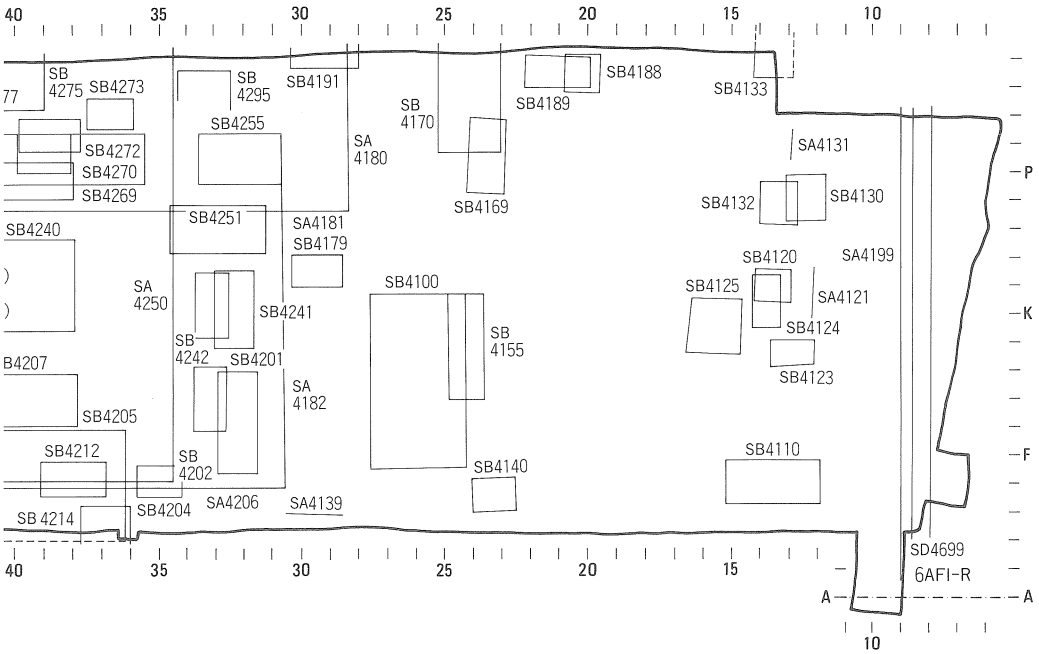


Fig. 4　第178次調査区遺構略図　1：800

（SB4284）は東西溝（SD4162）より新しいとわかる。東西溝２条（SD4162・4163）は平行する。道路側溝か。

２・６　西から43区まで精査。他方、35区以東は、暗灰土を掘下げて遺構検出を開始。南北塀（SA4250）13間分検出。西からくる東西塀（SA4181）より古いと判明。

２・７　43区の南北塀２条のうち古い塀（SA4390）は20尺スパン、新しい塀（SA4389）は10尺スパンと判明するが、北半（SA4181・4288以北）はよくわからない。

２・９　42区の南北に細長い土坑は、いずれの建物（SB4270・4274・4275・4277）より古いとわかる。

２・10　32～34区で建物や塀（SB4201・4202・4251・4255、SA4181）まとまりはじめる。

２・12　40区の南北溝（SD4266）掘下げ。檜皮多し。

２・14　40区の南北溝より建物（SB4270）が新しいとわかる。

２・16　30区では南北塀（SA4182）検出する。この南北塀は東西棟建物（SB4255）の東妻に取り付く。さらに、この南北塀は井戸（SE4185）や西からくる東西塀（SA4181）より古い。また、東西塀は40区の南北溝（SD4266）より古いと判明する。

２・19　35・36区の南端を拡張して建物（SB4205）の南庇を確認。他の建物との先後関係も判明する（SB4207→SB4205→SB4203・4212）。28区では、南北塀（SA4180）を検出し、西からくる東西塀（SA4181）とつながることを確認する。

２・20　40区以西の溝と土坑の断面図作製と写真撮影。

２・21　27区以東については暗灰色土面で遺構検出することに改める。この面で南北溝（SD4165）、建物（SB4100・4170）が出はじめる。第103－１次調査区も再調査。34区以東の遺構検出と掘下げほぼ終了。

２・25　遺構が見にくいため、26区からは暗灰色土を掘下げて整地土面で検出することに再度改める。建物（SB4140・4155・4169）を検出する。

２・27　第103－１次調査で発掘した蛇行溝（SD4150）の埋め戻しの土を排除し、周辺を精査する。蛇行溝の周囲には一まわり大きい旧河川があったこと、蛇行溝はある時期に埋戻していることなどを再確認する。

３・４　蛇行溝の北で南北溝（SD4166）と井戸（SE4160）を検出。南北溝は蛇行溝の最終埋土より古いと判明。

３・６　蛇行溝は南辺部のみを東西に掘下げて土層を観察する。東は第141－35次調査区を再調査。

３・12　第141－35次調査区の東は遺物包含層を掘下げて遺構検出。小規模な建物（SB4110・4121・4130）まとまる。

３・16　蛇行溝は調査区の北東隅にのびる。第118－23次調査区の再調査。

３・17　９～７区に東二坊々間路西側溝（SD4699）を検出。大きくみて３層あり、上層から掘下げ開始。

３・18　西側溝の下層にかかる。木簡、漆器、和同開珎、墨書土器など出土。

３・23　西側溝完掘。東端と中央から西に向って清掃開始。

３・26　20・21区のＰ～Ｔ区間を掘下げて建物（SB4188・4189）まとまる。10：00～記者発表。

３・28　１：30～現地説明会。参加約250名。

３・30　11：00～遺構実測図作成のためのヘリコプターによる撮影（以下、空撮）。１：00～写真撮影。全景を東の市庁舎と南の史跡文化センターからとる。

３・31　遺構の地上からの写真撮影（～４・２）。

４・３　調査区四周と畦の土層図作成。次の調査班も参加（～４・30）

４・10　柱穴の断割調査と井戸の掘下げ（～４・30）。この間、38区の南北塀（SA4182）は東西塀（SA4206）とＬ字状に接続し以南にのびないこと、井戸２基（SE4145・4185）は改修があることなどが判明した。

４・25　遺構保存のために砂を全体にかけはじめる。

４・30　柱穴と井戸の断面・平面図の完成をまって砂入れ。調査終了。

付　第103－１次調査　　６AFI区Ｒ・Ｓ地区

1977年５月９日～1977年６月２日

４・23　発掘区設定（南北91m　東西８m）。

４・28　重機による盛土・耕土・床土の排除。

５・９　重機による排土終了。ベルトコンベヤーを設置。南半（Ｒ地区）からと北半（Ｓ地区）

から、それぞれ北にむけて遺物包含層を掘下げ、検出を開始する。R地区南端で柱穴列(SB4155)、S地区南端で柱根のある柱穴(SB4315)を検出する。

5・10　R地区K～M区で小さな柱穴を検出するが、柱穴の輪郭は明瞭でない。

5・11　R地区I～L区で土坑か旧河川を埋めたてた大きな落ち込みを検出（SD4150)。N区では東西溝(SD4162)とこれより古い柱列(SA4159）を検出。

5・12　R地区北半で建物（SB4169・4170）まとまりはじめる。東辺のQ～S区に小柱穴(SB4198)あるがまとまらない。

5・16　S地区の本格的検出に入り、建物（SB4310）ほぼまとまる。R区からつづく建物（SB4170）は桁行7間と確定。

5・18　S地区中央部で小さな柱穴を多数検出したが、柱穴の輪郭が明瞭でない。建物2棟（SB4315・4325)の存在を確認。

5・20　S地区は北端に到達。小さな柱穴があるが、建物1棟（SB4333）の他は塀か。R区は南から再検出を開始し、新たに柱列（SB4100）と、既検出の建物（SB4155）より古い斜行溝（SD4149）を確認して掘下げる。

5・23　R地区の大きな落ち込み（SD4150）を掘下げる。上から3層目の木屑層から木簡が1点出土。この下はバラス層。

5・24　全体を清掃。3：00～写真撮影。

5・25　遺方を組み、実測をはじめる。

5・30　R地区を拡張して、大きな落ち込み（SD4150）の性格を明らかにするため拡張（南北15m、東西8m)。その結果、くの字形の蛇行溝と判明。菰川の旧流路か。

5・31　蛇行溝の掘下げ。

6・2　調査終了。

付 第112－3次調査　　6AFI区R・S地区
1978年7月1日～1978年7月21日

7・1　南北2ヶ所に発掘区（東西21mと30m、南北6m）を設定し、重機による盛土と耕土排除。北区は水田で耕土を排除。

7・3　ベルトコンベヤーとテント設置。

7・4　猛暑の中、調査開始。四周に排水溝を掘ったのち、東から床土除去。地区杭を打つ。

7・6　南区は床土除去終了し、西から遺物包含層を厚目に削って遺構検出にかかる。49区と51・52区で二・七坪の坪境小路両側溝（SD4229・4231）検出。北区は西から床土除去にかかる。地区杭打ち。

7・7　南区は西端を拡張し、南北溝（SD4231）全体を出して掘下げ。土器多く、土馬も出土。北区は床土除去終了。東から遺物包含層面で検出にかかる。柱穴らしきものあるが不明瞭。

7・11　南区の小路両側溝掘下げ。東側溝(SD4229）は2層あり、下層は幅が広く、側壁が直に深くなる。東南部の遺物包含層から二彩小壷が出土。北区でも小路両側溝を検出し掘下げる。

7・12　南区の小路両側溝完掘。南区では東から、北区では西から遺物包含層を掘下げて遺構検出。北区で柱穴列（SA4394）出はじめる。

7・13　前日雨のため、午前中水替え。南区で小さな柱穴群（SB4221）検出。

7・14　北区東半部で建物や塀（SB4480、SA4392）を検出。南区でも新たに建物（SB4223）を検出。

7・15　南区は清掃、北区は柱穴の検出を続行。

7・17　全体を清掃し、午後から写真撮影。のち実測のための遺方開始。

7・18　午後から実測。

7・20　調査区四周の土層実測。柱穴の断割りと実測。

7・21　砂を入れ、調査終了。

付 第118－23次調査　　6AFI区R地区
1979年12月17日～1979年12月21日

12・17　十文字の発掘区(南北18m、東西14m)を設定し、重機によって盛土・耕土・床土を排除する。

12・18　遺物包含層除去。9区で細い南北溝と、7・8区で二坊々間路西側溝（SD4699）を検出し掘下げる。西側溝は大きく上下2層がある。

12・19　西側溝の掘下げほぼ終了。木簡のほか多数の木製品・土器などが出土。

12・20　写真撮影ののち、遺方を組む。

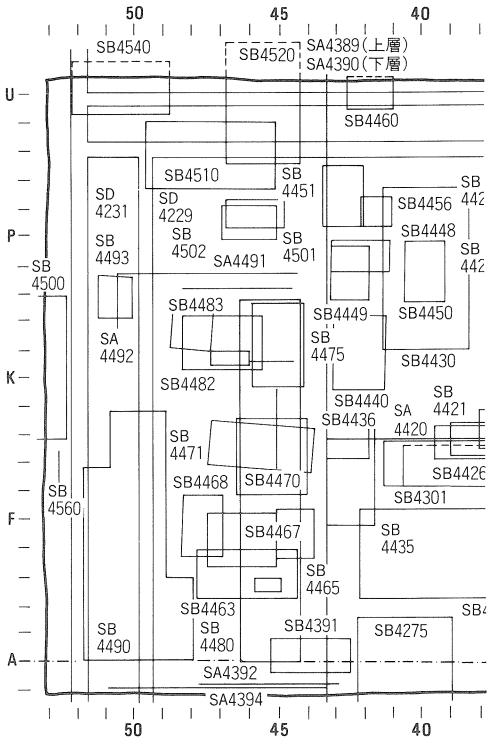
12・21　実測ののち砂を入れ、調査終了。

付 第141－35次調査　　6 AFI区Ｒ地区
1982年３月９日～1982年４月12日

３・９　発掘区設定（南北50m、東西12m）。
３・11　四周の排水溝を掘る。水多し。ベルトコンベヤー設定し、耕土除去にかかる。
３・14　地区杭打ち。
３・15　床土除去にかかる。
３・18　床土除去終了し、西から遺物包含層面で検出にかかる。遺物包含層はＲライン以前にある。北端は黄褐色粘土の地山面であり、柱穴列が出る。
３・19　東から遺物包含層を掘下げて遺構検出。南端でも黄褐色粘土の地山面が出る。
３・23　連日の雨で検出ははかどらない。南北両端をのぞいた間の部分は旧流路であり、この中央Ｌ・Ｍ区が奈良時代の流路（SD4150）とわかる。小柱穴あるがまとまらない。
３・26　南に10mほど拡張する。流路（SD4150）を掘下げはじめる。
３・31　南半部の柱穴は建物（SB4120・4124）にまとまりはじめる。
４・２　掃除ののち、写真撮影。
４・３　遺方設定。
４・４　実測開始。
４・５　柱穴の精査と断割り。
４・６　東南隅の土坑を掘下げたところ井戸（SE4117）と判明。
４・８　旧流路面の土坑から平城宮Ｉ期の土師器盤と習書木簡１点が出土。井戸（SE4117）を掘下げたところ、調査区外に新しい井戸（SE4116）があると判明。
４・11　調査区を拡張して、新発見の井戸を掘下げる。実測はほぼ終了。
４・12　新発見の井戸の実測。のちさらに掘下げるが危険なため深さ１mほどで中止。砂を入れて調査終了。

B　第184次調査　　6 AFI区Ｒ地区
1987年３月31日～1988年２月１日

３・31　東半の調査区（東西約60m、南北約54m）について地区杭打ち。耕土と床土は重機によってすでに除去済。
４・２　調査開始。調査区の北と東に排水溝を掘る。土層は床土、灰褐色土、暗灰色土、整地土、地山の順であり、東から灰褐色土面で検出をはじめる。
４・３　北端のST18区（七・八坪間の小路上）で、差し銭状態の和同開珎約100枚を埋めた土坑（SX4355）を発見。写真撮影・実測後取り上げる。
４・４　西端36区にもベルトコンベヤーを南北に設定し、灰褐色土面で検出はじめる。
４・９　顕著な遺構はなく、31区から東は灰褐色土を掘下げる。この土には平安時代末頃の土器を含むことが判明。小さな穴があるがまとまらない。
４・14　ベルトコンベヤーを北端Ｕ区で東西に並べかえ、暗灰色土を下げ気味で検出することにする。
４・15　Ｕ区で七・八坪間の小路北側溝（SD4361）を検出し、一段掘下げる。SU32区で土馬まとまって出土。
４・16　小路々面上の28区で重複する柱穴列がみつかる。南北塀（SA4180・4780）のようで



あり、二・七坪だけでなく４坪（町）占地の可能性がでてくる。S・T区で南側溝（SD4359）検出。

4・17　南側溝を一段掘下げる。

4・20　南側溝以南で小規模な建物（SB4376・4378）まとまりはじめる。31ラインの南北畦以西ではQライン上に柱穴が東西に並ぶがまだまとまらない。

4・21　南北畦以西の柱穴は南北棟（SB4400）か。31ライン畦以東では第103－１次調査区を再調査。この東では小規模な建物（SB4345）がまとまりはじめる。

4・22　第178次調査からのびる南北塀２条（SA4250・4180）のつづきは出てこない。南北畦以東のOラインで柱穴列（SB4370の北妻）、N区で井戸と思われるもの２基（SE4340・4380）検出。

4・23　Kラインの東西畦まで進む。小さな柱穴あるがまとまらない。

4・24　SI27区で方形の穴から須恵器蓋と土師器杯が伏せた状態で出土。地鎮用か。

4・25　I・H区で多くの柱穴を検出。南北あるいは東西に並ぶ（SA4410・4415、SB4369北側柱列）。

4・27　Iライン上の柱列は塀（SA4410）で、28ラインの南北柱列（SA4180）とつながり、以東にはのびないと判明。東辺部は炭化物混りの遺物包含層（暗灰色土）が厚い。

4・28　F～D区を検出。28ラインの柱列（SA4180）はつづく。SE31区の小土坑（SX4397）から銅鏡出土。井戸（SE4366）を検出。

4・30　南端C区まで到達し、折返して精査する。第178次からつづく28ラインの南北塀（SA4180）と建物（SB4170）の北妻および26ラインの南北大溝（SD4165）を検出。

5・1　SD34区で井戸状遺構（SE4395）検出。降雨のため午後中止。

5・2　Gラインまで進む。36ライン上で大型の南北柱列（SB4300の東妻）を新たに発見。34区では第178次からつづく南北塀（SA4250）も出はじめる。26ラインの南北溝（SD4165）は七坪内の区画溝か。

5・6　34区南北塀は井戸（SE4395）より古いと判明。東辺では小さな穴多数あるが、第103－１次調査区分とあわせて建物１棟（SB4315）がまとまる。

5・7　Kラインの東西畦近くまで進む。28ラインの南北塀（SA4180）は、東西塀（SA4410）と連続するがさらに北にも延びること、東西塀の西には２条の南北塀（SA4250・4415）が平行すること、建物（SB4369）は東西塀より新しいことなどがわかった。

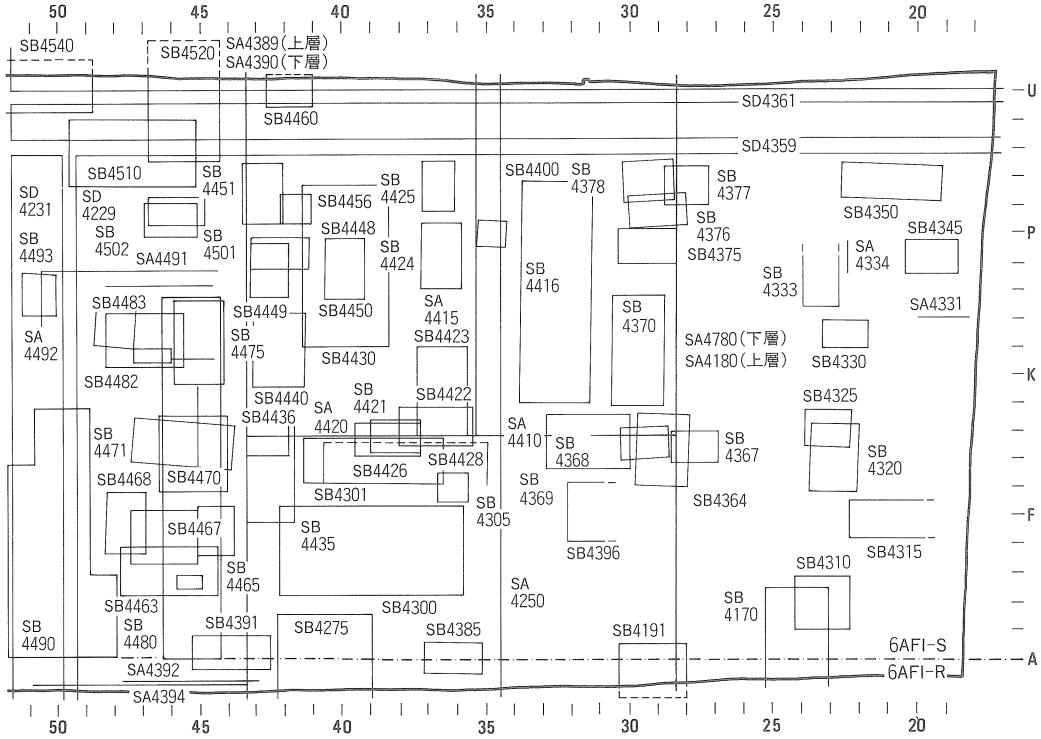


Fig.5　第184次調査区遺構略図　1：800

5・9　3条の南北塀および26ラインの南北溝(SD4165）はさらに北につづく。東辺では小穴あるが、まとまらない。

5・10　本日より、調査の関係上、第178次調査区との間に残していた未調査区（Cライン以南、幅約10m）と西の36～52区（東西約50m、南北約65m）までの耕土を、重機で排除することになり、調査は中断。

5・18　午前中排水。午後からKライン畦以北を精査するが捗らない。

5・20　南北塀3条は北にのびる。東辺の小規模な建物（SB4345）まとまる。

5・22　S・T区まで進む。南北塀2条（SA4180・4780とSA4415）は七・八坪間の小路南側溝（SD4359）より古いと確定。南側溝は2時期あるようである。下層は遺物がほとんどない。東辺で柱穴列（SB4350）検出。

5・25　小路北側溝（SD4361）の北岸を明らかにするために、北に0.6mほど拡張。

5・26　小路北側溝も2時期あると判明。

5・27　南北塀3条(SA4250、SA4180・4780、SA4415）は北側溝より北に続くと判明。南に折返して再精査。

6・1　Kライン畦まで進む。本日、重機で排土した南辺と西半部の調査区の地区杭打ちを実施する。

6・4　Iラインまで再精査。西半調査区の北・西辺に排水溝を掘る。

6・12　Cラインまで再精査。Cライン以南は灰褐色土除去。

6・13　Cライン以南暗灰色土面で検出。東辺では第178次調査区から続く建物（SB4170）を検出。

6・16　西では南北塀2条（SA4180・4250）の柱穴すべて出る。

6・17　水替えののち清掃。

6・18　11：30～空撮。2：00～写真撮影（全景写真は南の史跡文化センターから)。

6・19　午前中は写真撮影。午後から南端にベルトコンベヤー設定。

6・22　36区以西の床土除去と並行して35区以東のCライン以南精査。小規模な建物（SB4385)と第178次調査区から続く建物(SB4191)を検出。

6・24　35区以東の遺構の精査を終了する。午後から七・八坪間の小路両側溝上層の実測。36区以西はE区まで床土除去。薄いので灰褐色土も除去する。

6・30　36区以西の床土と灰褐色土の除去はR区まで進む。

7・1　調査班交替。36区以西について北端から折返し、暗灰色土を若干掘下げて遺構検出を開始する。

7・2　T・U区で七・八坪間の坪境小路北側溝（SD4359）、S区で南側溝（SD4361）を検出。南側溝は二・七坪間の小路を横切っていること、北側溝は44ライン畦で断割り2時期あることを確認。また、北側溝の北肩に堆積する炭混り黒灰色土（44ライン畦より西）を除去して、一・八坪間の坪境小路両側溝が北側溝に合流することを確認。

7・6　南側溝のほぼ全体を検出。44ライン畦で断割った結果、3時期あるらしいと判明。最下層下で柱穴（SA4389・4390）を確認。

7・7　北側溝を一段掘下げ。小路々面で柱穴検出するがまとまらない。

7・8　北側溝は48ライン畦以東の上層をほぼ完掘。畦以西も掘下げはじめる。南側溝も掘下げ開始。3時期とみた南側溝のうち、最古の溝は38～47区にのみあり部分的と判明。途切れた部分で柱列（SB4520）検出。

7・10　南側溝を一段掘下げ。南側溝以南で柱穴を検出。44ライン畦以西では南側溝より古い東西棟（SB4510）がほぼまとまる。

7・11　44ライン畦東の南北塀（SA4389・4390)は南側溝以南と北側溝以北でも検出。

7・13　南側溝以南では小さな柱穴が多数あるがなかなかまとまらない。44ライン以東では、大きな柱穴があり、南北棟（SB4430）になりそうである。

7・17　P～N区まで進む。

7・20　N～K区まで進む。小さな柱穴は多いが、まとまらない。44ライン以東の大型の南北棟（SB4430）は、桁行6間で東庇付と確定。

7・21　Iライン畦まで到達。折返して精査と掘下げ。Iライン上の柵列（SA4420）は42区で止まり以西に延びない。

7・22　Lラインまで精査と掘下げ。34・35区の平行する2条の南北塀（SA4250・4415）は、柱筋が揃い単廊になる可能性を考えたが、以西はIラインの柱列が一条であり、回廊にはならないことがわかった。

7・25　Kライン畦以南の精査。柱穴の重複が多く、検出は困難を極める。

7・27　I区まで進む。44ライン畦の西ではJライン上で大きな柱列（SB4490の北妻）を検出。北西の柱穴の抜取り穴には、鞴の羽口が左右に2個あり、炉として使用したと判明。実測ののち写真撮影。

7・28　H区まで精査と掘下げ。43ライン上の柱列は3回の重複がある（SA4410、SB4420など)。二・七坪間の坪境小路西側溝に注ぐ西から

の玉石組溝（SX4557）を検出する。この玉石組溝より古い柱穴があり、南北に並ぶ(SB4500東妻)。

7・30　G区まで進む。G区で東西方向の柱列（SB4301）を検出。

8・3　SF52区で二・七坪間の坪境小路西側溝下層と一連の東西溝（SX4556）を検出。

8・4　E～C区の精査。44ライン畦以東で四面庇建物（SB4300）まとまる。畦西では、C区で、二・七坪間の坪境小路西側溝に注ぐ二坪からの塼敷東西溝（SX4555）を検出。

8・5　44ライン畦西のC区で検出した塼敷溝には、重複して石組溝もあったことを確認（のち8・7に西側溝上層に塼敷溝が、西側溝下層に石組溝が対応することを確認)。

8・6　44ライン畦の西で2条の南北柱穴列（SB4480）を検出。

8・7　第112－13次調査区も再調査。48ラインで南北溝（SD4282）を検出。Bラインで東に折れるようである。Cラインでも東西溝(SD4462）を検出。

8・8　南端まで精査。本日、主要遺構を検討し、第178次調査区から続く南北塀3条(SA4250、SA4389・4390、SA4415）は七・八坪間の坪境小路を越えて八坪にも及ぶこと、これらの塀によって区画された東辺は2条の東西塀(SA4410・4420）によって南北に二分され、北に南北棟（SB4440)、南に双堂（SB4300・4301）が建つことなどを確認した。ベルトコンベヤーを28～36区以東にも設定し、遺構の再検出を試みる。

8・10　南から折返して再精査。44ライン畦西の南北棟2棟（SB4480・4490）の南妻を検出。

8・11　A区で東西溝（SD4460）を検出し掘下げ。この溝底で柱穴(SB4480・4490)を検出。二・七坪間の坪境小路両側溝(SD4229・4231）は2時期あり、下層溝下で柱穴（SB4490）を検出。

8・12　C区で東西溝（SD4461）を検出し掘下げ。側壁は直に50cmほど落ちる。桧皮多し。

8・13　C区の東西溝下で柱穴列（SB4480・4490）検出。

8・17　D区まで再精査。44ライン畦西では、西の南北棟（SB4490）の床束を検出。東の南北棟（SB4480）の柱抜取穴はとくに大きいことを確認。

8・19　午前中、空撮。午後、44ライン畦東のE区を再精査し、建物（SB4300）が4面庇付きであることを確認。

8・21　F～I区再精査。4面庇付建物（SB4300）と並ぶ東西棟（SB4301）は、42区に柱穴がなく4面庇付建物と桁行が異なると判明。

8・24　Iラインの柱列を再精査した結果、東西塀（SA4420）が東西棟（SB4301）より新しいと判明。小さな建物(SB4436）もまとまる。

8・28　Q区以北の再精査と掘下げ。10：00～記者発表。

8・29　2：00～現地説明会(参加者約250名)。

9・1　七・八坪間の坪境小路両側溝の上層を完掘。

9・3　北側溝下層の掘下げ。

9・4　南側溝下層の掘下げ。

9・9　小路上の再精査後、全体の清掃を開始。

9・14　31ライン畦以東の再精査と掘下げ。

9・19　二・七坪間の坪境小路西側溝下層の掘下げ。その結果、南北棟建物（SB4490）に西にも庇が付くと判明。

9・22　午前中、空撮。午後から遺構の写真撮影。

9・28　二・七坪間の小路東側溝下層の掘下げ。その結果、南北溝建物（SB4490）には床束があると判明。

9・30　写真撮影。

10・1　調査班交替。調査区四周の壁と東西・南北畦の土層実測開始。調査区東南部、A～D区、18～22区間に残っていた炭混り暗灰土を除去して検出するが、顕著な遺構はない。

10・3　44ライン畦の土層実測は建物（SB4480）の柱穴が深くなかなか進まない。

10・7　44ライン畦以西の建物（SB4480・4490）の柱穴断割り調査。

10・20　44ライン畦以西の建物のうち、1棟（SB4490）の柱穴にはすべて礎板を用い、他の1棟(SB4480)の柱穴は1個の掘形に2個の柱をたてていることが判明。西壁と44ライン畦のSM区では、奈良時代の整地土下に、東西大溝（SD4411）があると、断割りでわかる。

10・25　44ライン畦北西の建物（SB4510）の柱穴にも礎板を使用していることがわかる。実測・写真ののち掘下げる。

11・9　31～44ライン間南半の柱穴の断割り調査に入る。

11・18　Iライン上の柱穴について先後関係を再検討。その結果、東西塀（SA4420）が東西棟（SB4301）より古いと判明。

11・24　31～44ライン間北半の柱穴の断割り調査に入る。

12・5　31ライン以東の柱穴の断割り調査に入る。

12・16　柱穴断面図の作成と写真撮影終了。

1・8　調査班交替。井戸の掘下げ。

2・1　井戸掘下げと実測および写真を終え、調査終了。

C　第186次(北・北II区、補足)調査

6 AFI区R・S地区
1988年7月1日～1988年9月26日（A区）
1988年8月1日～1988年8月13日（D区）

北区

10・1　地区杭打ち（東西約53m、南北約15mの調査区を設定し、重機で耕土まで排除)。一時休止。

10・13　東西両端にベルトコンベヤーを設定し、床土除去開始。

10・21　31ライン畦まで進み、各々東と西に折返して灰褐色土除去。

10・23　ベルトコンベヤーを北端で東西に並べなおし、北から暗灰色土除去に改める。

11・9　南から折返して整地土面で遺構検出開始する。

11・14　G区で東西塀（SA4790）検出。

11・16　北から折返して精査。西端では地山が出るが、東にむかっては整地土があり、遺構はよくみえない。遺物包含層が残るためか。

11・19　南端まで進む。東西塀（SA4790）以南では建物2棟（SB4782・4817）がまとまるが、第184次調査区から続く南北塀(SA4180・4780)はよくみえない。

11・21　南端で東西溝（SD4796）を検出。折返し、整地土を下げて遺構精査。

11・25　F・G区を精査する。建物2棟（SB4781・4782）まとまる。第184次調査区から続く新旧2時期の南北塀（SA4180・4780）を検出。東西塀（SA4790）はこの塀に接続することを確認。

11・30　全体の清掃開始。

12・2　11：00～空撮。午後、遺構の写真撮影。

12・8　柱穴の断割りと実測開始。

12・9　34区の南北溝（SD4787）を掘下げる。意外と深い。

12・16　調査区四周の土層実測。南北塀（SA4372・4780）は整地土面から掘込むが、建物（SB4791）と南北溝（SD4779）は暗灰色土面から掘込むことを確認。

12・22　TG26区の大土坑（SE4770）掘下げ。下層から木簡や削屑出土。

12・23　TG26区の大土坑の下層から、養老元年の紀年をもつ「帳内」の木簡が出土。居住者が皇族に関わることが判明。舎人親王か（のち1・8赤外線撮影で「長屋皇宮」木簡があったと判明)。

12・24　TG26区の大土坑（SE4770）の土層実測と写真撮影。

12・25　TG26区の大土坑（SE4770）完掘。埋戻して北区の調査終了。

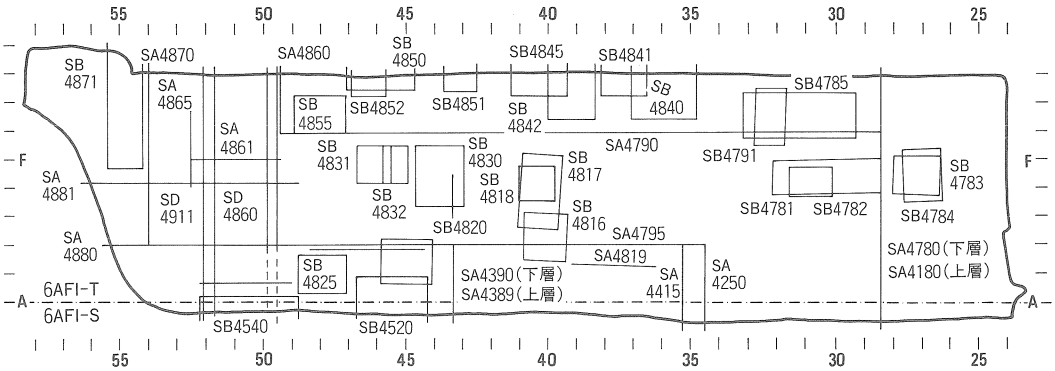


Fig.6　第186次（北・北II・補足）調査区遺構略図　1：800

北II区

1・20　床土除去開始（東西約40m、南北約16mの調査区を設定し、重機によって盛土と耕土を排除)

2・2　地区杭を打つ。北から灰褐色土を除去して遺構検出を開始する。一・八坪間の小路両側溝出はじめる。小さな柱穴があるがまとまらない。

2・4　Gラインで東西塀（SA4790）出はじめる。

2・12　南端C区まで到達。折返して暗灰色土

を掘下げ遺構検出。東西細溝（SD4796）は、一・八坪間の坪境小路両側溝より古く、整地土面から掘込まれていることを確認。

2・13　D・E区の暗灰色土掘下げ。46～48区では小さな柱穴を多数検出。西端54ライン上では南北塀（SA4870）出はじめる。

2・18　G・H区まで進む。Gライン上の東西塀（SA4790）は暗灰色土を掘下げて柱穴が出揃う。50区以西にはなく、南北塀（SA4860）とつながることを確認。

2・24　遺構検出と掘下げ終了。清掃開始。

2・26　雨のため空撮延期。

3・3　12：30～空撮。2：00～第186次西区とあわせ記者発表。

3・4　写真撮影。

3・5　2：00～第186次西区とあわせて現地説明会（参加者約500名）。開始後20分で降雨。早々に散会。

3・8　調査区の周囲と中央畦の土層実測開始。柱穴の断割りと実測および写真撮影開始。

3・15　断割った所を埋戻し、北II区の調査を終了。

補足調査

7・12　調査区（南北約9m、東西総長約115m）の盛土と耕土を重機で排除しはじめる。

7・29　東24区から床土を除去し、灰褐色土面での遺構検出を開始。

8・1　27区まで進み、土坑2基の他、細溝3条検出。

8・3　工事（市道付け替え）の都合上、32区以西は重機で灰褐色土と暗灰色土を除去することになる（排土中の遺物は大まかに地区ごとに採取する）。

8・4　28区まで整地土面で検出進む。28区で南北塀（SA4180・4780）とその西で井戸（SE4760）を検出。

8・8　31ライン畦以西については、ベルトコンベヤーを南で東西に並べ、北にむかって検出することに改める。SU38区で井戸（SE4815）検出する。TA40区の地山上面で三彩陶器の破片が出土する。

8・9　B区まで進む。34・35区で南北塀2条（SA4250・4415）が出はじめる。付近に野壷多し。

8・11　31～37区のCライン上で東西塀（SA4795A・B）を検出。34・35区の南北塀2条はこれらの東西塀に取付くことを確認。45～47区では第184次調査区から続く建物（SB4520）がまとまる。他に、小規模な建物（SB4820）も検出。

8・12　48ライン畦の西でA・B区の検出にかかる。一・八坪の坪境小路両側溝とこれより古い柱列（SB4560）検出。

8・13　48ライン畦以西ではC区まで進む。東西塀（SA4795）出はじめる。西端のDライン以北は、調査期間が限られているため、再度重機によって地山面まで排土することにする。

8・16　48ライン畦以西のD区まで検出。東西塀（SA4795）は、一・八坪間の坪境小路側溝より古く、小路々面をこえて西に延びること、54ラインで第186次北II区から続く南北塀（SA4870）に逆T字形に接続すること、L字状の溝（SD4796・4875）がこれらに伴うことなどを確認した。清掃に入る。

8・17　11：00～空撮。午後、遺構の写真撮影に入るが3カットで豪雨。調査区は水没してしまった。

8・20　写真撮影後、調査区の周辺の土層実測と柱穴の断割り調査開始。28区の南北塀（SA4372・4780）は2時期の重複があることを確認。本日は土曜日であるが、午後も実測に赴く。現場に着くと降雨。

8・22　水替えののち柱穴の断割り調査と実測再開。Cライン上の東西塀（SA4795A・B）は48ライン以東では建て替えがあったことを確認。井戸3基（SE4530・4760・4815）の掘下げ開始。

8・23　本日、調査期限最終日。井戸3基の掘下げと実測および写真撮影終了。井戸枠を取り上げて調査終了。

D　第186次（西・西II区）調査

6AFI区S・T地区
1987年10月26日～1988年7月20日（西区）
1988年1月27日～1988年3月23日（西II区）

西区

10・26　調査区（東西約84m、南北約38m）の重機による耕土除去が完了し、東端から床土除

去開始。
10・29　SJ54区では床土直下で井戸(SE4580)検出。周辺は瓦敷きか。
11・6　床土除去は56区まで進む。
11・12　床土除去は62ライン畦まで進む。遺物包含層は薄く、ない所もある。
11・17　床土除去は71ライン畦まで進む。
11・19　74区以西で建物のコンクリート基礎の撤去にかかる。
12・3　西端80区に到達。折返して部分的に残る遺物包含層（暗灰色土）を除去し、遺構検出開始。整地土も薄く、地山面が所々に出はじめる。柱穴は深さが15～20cmほどしかないものもある。
12・4　78区まで進む。検出面は地山で、その1/3は旧流路と思われる砂地。
12・5　76区まで進む。建物（SB4660・4670・4676）ほぼまとまる。
12・7　73区まで遺構検出。北半で建物1棟（SB4675)、南半で建物2棟（SB4651・4653）ほぼまとまる。SI76区の大土坑は井戸（SE4655）か。
12・8　73～71区の遺構検出を行う。Kライン畦をはさんで東西棟（SB4631）とこれより新しい柱穴列（SB4632）を検出する。南半では南北棟3棟（SB4651・4652・4654）まとまる。
12・9　70・71区の遺構検出。Kライン畦以東は暗灰色土があるが、遺構はなさそうなので掘下げる。
12・11　66区まで進む。Kライン畦をはさむ位置で東西棟（SB4631・4632）とこの北で南北棟（SB4640）ほぼまとまる。69ライン上では南北塀（SA4610）を検出。この西にも南北の柱列があるが、塀か建物か不明。本日より、東端53区からも遺構検出を開始。53区の南北溝（SD5258）は井戸（SE4580）の掘形より古い。二坪西面築地の西雨落溝か。
12・12　西では65区で南北大溝（SD4584）を検出。東端からの検出は中止。
12・15　64～61区の遺構検出。南半では大型の建物2棟まとまりはじめる。1棟（SB4575）は第118－15次調査区から続く可能性が高い南北棟であり、他の1棟（SB4570）は前者より新しいと判明。
12・16　60・59区の遺構検出。北半に大型の柱穴があるがまとまらない。南半では新たに建物（SB4551）と東西大溝（SD4583）を検出。東西大溝を掘下げ、底で柱穴（SB4581とSB4570の北庇）を発見。
12・17　59・58区まで進む。北半の大型の柱穴は、建物（SB4600）になりそうだが、Kライン畦の南にも柱筋の揃う柱列がありまとめきれない。
12・18　南半の東西棟建物2棟（SB4451・4470）まとまり、ともに桁行7間と判明。
12・24　55～53区まで進む。
12・25　54区で検出。南半の南北溝(SD4569)はGラインの東西溝（SD4564）と連結し、逆L字形の塀（SA4567・5356）に伴うか。
1・8　調査班交替。東端53区から西にむけて精査と掘下げ開始。部分的に残る暗灰色土を掘下げ、第184次調査区で東妻を検出している大型建物（SB4500）の柱穴探し。
1・11　大型建物（SB4500）の柱穴ほぼ出揃う。南北両庇付で、身舎は梁間が3間、桁行が7間。桁行の柱間は両端間が14尺、他は10尺と判明する。
1・12　南半で新旧2時期の南北棟（SB4566→SB4565)がほぼ確定。ともに東庇付。
1・18　南半55区の南北塀（SA4567）に伴う可能性の高い南北溝（SD4569）は建物（SB4566）より古いと判明。
1・19　井戸（SE4580）周辺の瓦を取り上げて掘下げ。大型建物（SB4500）の床束発見。第186次北II・西II区の調査を優先し、第186次西区の調査は本日をもって一時休止。
2・24　精査再開。北半の大型建物(SB4500)の西妻まで検出。60区以西については、空撮の都合上、精査を一時中止。
2・25　全体の清掃。
2・26　第186次北II・西II区とともに空撮を予定していたが、降雨のため延期。
3・3　12：30～空撮。2：00～記者発表。
3・4　第186次北II・西II区とあわせて遺構の写真撮影。
3・5　2：00～現地説明会(参加者約500名)。
3・9　56区以東は柱穴の断割り調査。57区以西は遺構の精査を再開。
3・11　57区以東の柱穴の断割りと土層図作成を継続。以西の精査は58区まで行なうが、中止。
3・19　SJ54区の井戸（SE4580）の掘下げ開始。井戸枠内から9世紀前半の土師器出土。
3・24　SJ54区の井戸は、井戸枠内を約3m、掘形を約1.5mまで掘下げ。
3・29　SJ54区の井戸枠取上げ。井戸枠内の埋土を水洗し、銅銭多数を発見。
3・31　SJ54区の井戸枠の取上げと掘下げ続行。
4・1　調査班交替。旧調査班とともにSJ54区の井戸枠の取上げと掘下げ。終了後、掘形の写真撮影。
4・4　SJ54区の井戸を埋戻す。59区以西に

ついて遺構の精査再開。

4・6　62ライン畦まで進む。北半は畦東際で新たに南北の柱穴列を検出し、大型の建物（SB4600・4601）の柱穴が増加するが、まだまとまらない。南半ではC区の東西大溝（SD4571）下で柱穴列を検出。第118－15次調査区で検出している建物（SB4550）の北庇で、この北の建物（SB4551）と南北に柱筋を揃えて並ぶ可能性が大きい。調査区南西隅については、下水道のマンホール設置を急ぐため、精査と柱穴の断割りを先行させる。

4・8　62～64区でNライン以北に残る暗灰色土を除去。

4・11　62～64区のKライン畦以上で大型の柱穴検出。建物（SB4600・4601）の柱穴だが、まだまとまらない。

4・14　65区の南北大溝（SD4584）の南半部を掘下げる。重複する柱穴（SB4550・4551・4575）はいずれも南北大溝より古いことを確認する。

4・22　西端まで到達。折返し、柱穴を再精査しながら清掃に入る。

4・25　73区のJ～L区で柱穴が重複することを発見。既検出の建物（SB4632）は桁行が1間西にのびる。

4・26　70区のG～I区で検出していた布掘り様の落ち込みを掘下げたところ3個の柱穴と判明。付近を精査して総柱建物（SB4625）であること、これに既検出の柱列(SA4620）が取り付くことを確認。

4・27　総柱建物（SB4625）の北で東西溝を検出。地覆石の抜取り痕であり、基壇があったか。SK66区の柱抜取り穴（SB4631）から大型の漆器が出土。

5・6　59区から折返し、再度精査と遺構の掘下げ。

5・9　58～65区の北端を約3m拡張し、大型建物（SB4600）の柱穴を探す。

5・10　総柱建物付近を精査して69ラインの南北塀（SA4610）が古いことを確認。

5・11　総柱建物付近を精査し、南北棟（SB4640）が桁行4間であり、東西棟（SB4631・4632）より古いことを確認。

5・12　西端まで到達し、清掃開始。

5・14　2：00～現地説明会(参加者約150名)。

5・17　午前中、空撮。午後、写真撮影。

5・18　午前中、写真撮影。午後から調査区周辺と畦の土層実測に入る。

5・23　調査区の西北部から柱穴の断割りと実測および写真撮影開始。

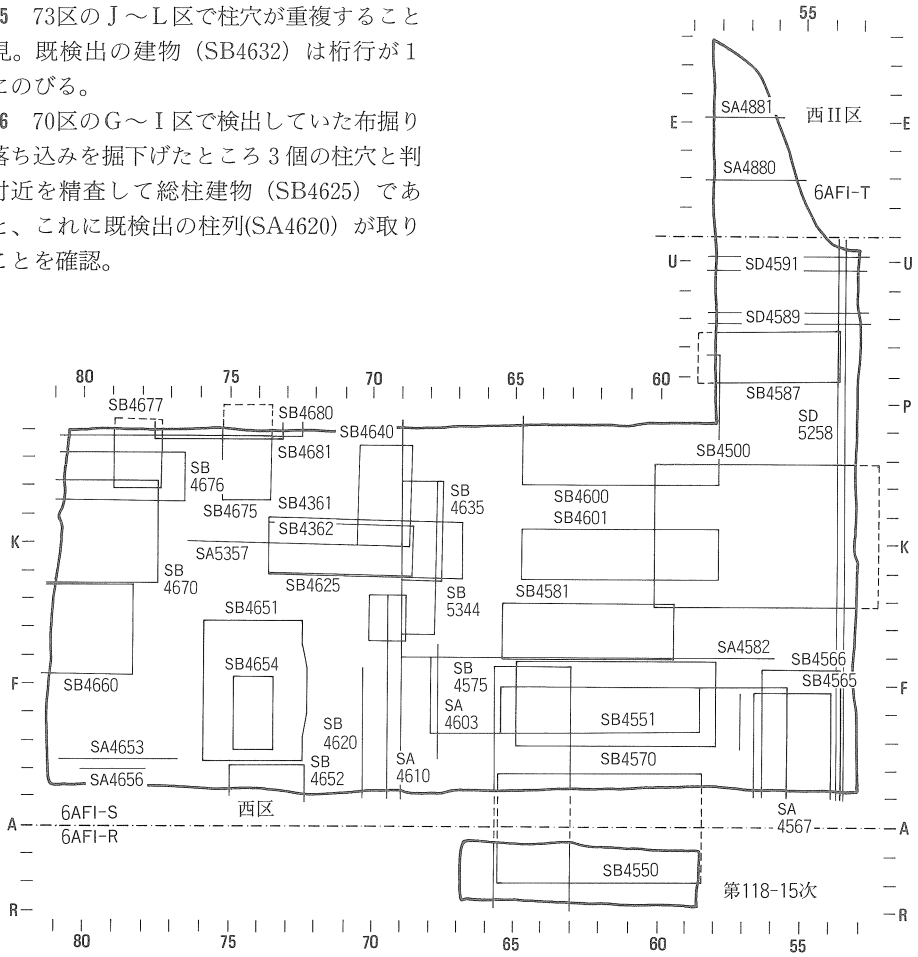


Fig.7　第186次（西・西Ⅱ）、第118－15次調査区遺構略図　1：800

5・24　総柱建物（SB4625）の柱穴を断割った結果、布掘りを埋めたのち柱位置のみ掘下げ、のち全体を版築しているとわかる。
5・26　柱穴の断割り調査は約80％終了。井戸（SE4655）掘下げ開始。SG58区で柱穴の断割り中に旧石器と思われる剝片が出土。
6・10　井戸（SE4655）の掘下げ終る。
6・13　断割り箇所の埋戻しと砂入れ開始。
6・14　SG57・58区で5×2mの範囲を掘下げ石器を探す。
6・15　縄文後・晩期頃の石鏃出土。
6・22　SF57区で2×2mの範囲を掘下げて石器を探す。
6・28　石鏃1点、剝片3点出土。
7・1　調査班交替。
7・3　石器は出土しない。調査中断。
7・19　石器を探した地区の土層実測と土壌採取。
7・20　砂入れ後、埋戻して調査終了。

西II区

1・27　調査区（南北総長約45m、東西最大幅約15m）の北から床土除去をはじめる。
2・5　南から折返し、遺物包含層を除去して遺構検出。
2・10　一・二坪間の坪境小路両側溝（SD4589・4591）を検出。小路々面上の炭混り土坑（SK4546）から素文鏡や土製竈が出土。
2・13　C区で東西塀（SA4880）検出。
2・17　南から精査と掘下げ。
2・18　一・二坪間の坪境小路南側溝掘下げ。
2・22　一・二坪間の坪境小路南側溝掘下げ完了。清掃開始。
2・26　降雨のため空撮順延。
3・3　12：30～空撮。
3・4　遺構の写真撮影。
3・5　2：00～第186次西区とあわせ現地説明会。
3・10　柱穴の断割り調査に入る。
3・11　土層実測も開始。
3・22　柱穴の断割り図面の作成と写真撮影終了。埋戻し開始。
3・23　砂入れののち、調査終了。

付　第118－15次調査　　6AFI区R地区
1979年10月2日～1979年10月6日

10・2　調査区設定（東西25m、南北6m）。重機によって盛土・耕土・床土を除去。
10・3　テント設営後、調査区の四周に排水溝を掘る。地区杭打ち。4時すぎから降雨のため作業中止。
10・4　前日の降雨のため調査区全面がヘドロ状となる。これを取り除くと遺構がみえはじめる。SラインとTライン上に一辺1mほどの柱穴が東西に2列各7個並ぶ。建物（SB4550）の庇であり、柱を南に抜取っていることから身舎（母屋）は北と推定できる。西妻は65区の南北溝（SD4584）より古い。63～65区間にやや小さな柱穴3列があり西庇付南北棟（SB4575）になる。これも南北溝より古い。
10・5　10時までに遺構検出と掘下げ完了。10：30～写真撮影。11：00～遺方設定。午後、遺構の実測および柱穴の断割りと土層図作成も終了。
10・6　土層図チェック。柱穴の断割り部分の写真撮影。遺方を撤去して調査終了。

E　第190次調査　　6AFI区S・T地区
1988年5月19日～1988年11月25日

5・19　調査区（東西約65m、南北約42m）の周囲に排水溝を掘る（西辺をのぞいて耕土は重機で排除完了）。
5・20　南から床土と灰褐色土の除去にかかる。
6・20　北端近くまで床土と灰褐色土除去完了（第186次西区の調査と併行のため進まず）。
6・28　西辺の排土と耕土を重機で取り、調査がほぼ終了した第186次調査区に移動する。
7・1　調査班交替。ベルトコンベヤーを調査区の西端に南北に並べ直して、西から床土と灰褐色土除去にかかる。
7・4　第193次調査及び第186次補足調査を急ぐため、第190次調査を中断。
10・1　調査班交替。71ライン畦の東と西にベルトコンベヤーを設定。70区以東は部分的に残る暗灰色土面で遺構検出開始。

10・3　71区以西も遺構検出開始。暗灰色土はほとんどない。70区では一・二坪間の坪境小路両側溝（SD4589・4591）出はじめる。柱穴もあるがまだまとまらない。

10・4　69・68区の検出。Cライン上で、第186次西II区から続く東西塀１条(SA4880・4890)が出はじめる。69ライン上では、第186次西区から続く南北塀（SA4610）を検出。Cラインの東西塀に取り付き以北に延びない。また、南北塀は小路北側溝より古いと判明する。北辺では東西棟２棟（SB4800・4810）がまとまりはじめる。

10・8　71ライン畦以東は66区まで進む。検出した柱穴は多いが、部分的に残る暗灰色土面では、柱穴がみえない。北辺の東西棟(SB4800)は間仕切があると判明。71ライン畦以西は76区まで進む。北辺ではほぼ方形の大土坑(SK4930)を検出。南辺では第186次西区から続く建物(SB4675)の北妻が出る。これに重複して古い建物(SB46801)も検出。

10・12　東は62区まで進み、北辺では重複する３棟の東西棟（SB4800・4810・4920）がほぼまとまる。いずれも長大である。

10・14　東は60区まで進む。北辺の長大な建物（SB4800・4810）の東妻はまだでないが、先後関係（SB4800→SB4810）が判明。一・二坪間の小路上には南北方向の細溝と東西方向の狭長な土坑が目立つ。後者には遺物が比較的多い。南辺では第186次西区で検出している建物（SB4600）の柱穴がでるが、依然としてまとまらない。西は74～75区まで進む。

10・17　東はほぼ東端まで到達する。北辺の東西棟（SB4800・4810）の東妻を検出。桁行は16間と14間であり、ともに南庇付と判明。またC区の柱列が東西塀（SA4881）であることもわかった。

10・20　西端の77・78区の検出。北辺で総柱建物（SB4940)。Cライン上の東西塀（SA4890）と南辺の東西棟（SB4680）は、調査区外の西にのびる。南辺ではさらに１棟（SB4681）まとまる。

10・21　遺構検出ほぼ完了し、西から遺構の掘下げ開始。

10・24　73～75区の掘下げ。北西部の大土坑（SK4930）は西半部の掘下げ終了。

10・24　73区の掘下げ。一・二坪間の小路々面上には東西と南北に交叉する布掘状の遺構がある。性格不明。

10・27　小路北側溝のSU72付近は、南側が大きく張出し、焼土、木炭片、鉄滓、鞴羽口などが多量に投棄されている。大土坑として取上げる。

10・28　71ライン畦まで進む。北辺の東西棟（SB4920）は71ライン畦西に延びることを確認する。

10・29　東端から遺構の掘下げ開始。D区の東西溝（SD4882）は細い割に深くV字状の断面を呈することがわかる。

10・31　60～62区の遺構の掘下げ。TC61区の大土坑は井戸（SE4885）と判明。井戸枠の四隅の柱を確認。井戸枠内の土器は奈良時代末のようである。

11・4　66～70区、B～D区に残っていた暗灰色土を掘下げ、東西棟（SB4900）がさらに東に延び桁行10間になることが判明。

11・5　２：00～現地説明会(参加者約300名)。

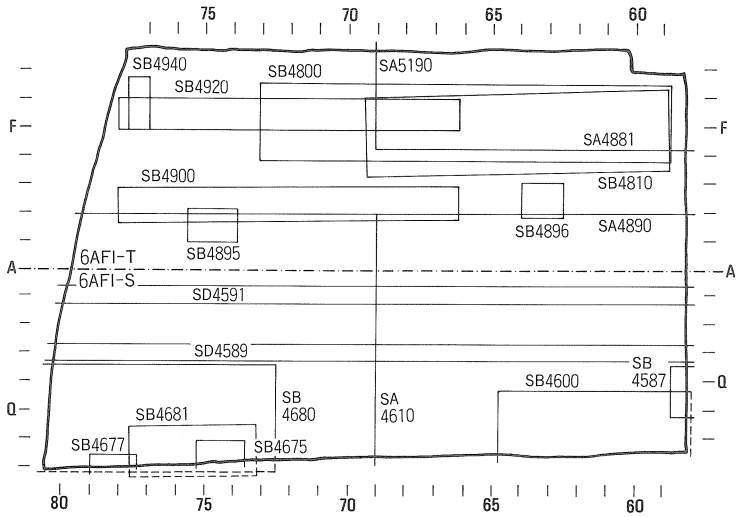


Fig.8　第190次調査区遺構略図　１：800

11・8　清掃開始。
11・9　調査区西南部の地山が砂地であるため、土壌硬化剤（ジオット）を墳霧して遺構を掘下げる。
11・11　11：00～空撮。午後、ハイライダーを用いて遺構の写真撮影。
11・12　11：30～空撮やり直し（前日の空撮不調のため）。
11・14　写真撮影。
11・15　調査区周囲の土層実測と柱穴の断割り調査開始。
11・16　井戸（SE4885）の掘下げも開始。
11・22　井戸は底に大型曲物の枠を設置していることがわかる。井戸枠内から「地子米」の木簡出土。
11・24　断割り箇所の埋戻しと砂入れ開始。井戸はほぼ完掘。
11・24　砂入れののち、調査終了。

F　第193次(A・D区)調査

6 AFI区R・S地区
1988年7月1日～1988年9月26日（A区）
1988年8月1日～1988年8月13日（D区）

A区

7・1　調査区設定(南北約68m、東西約8m)。重機による盛土・耕土・床土の除去は北から2/3が終了。
7・2　重機による排土は3/4が終了。北半部に地区杭を打つ。
7・4　重機による排土はほぼ完了。第190次調査区からベルトコンベヤーを移動。
7・5　調査区北端を3mほど拡張。調査区の東端に排水溝を掘る。土層は床土、灰褐色土、暗灰色土、地山（Kライン以北は砂地、以南は黄褐色粘質土）の順。
7・6　東の排水溝掘り終る。西にむけて灰褐色土面での遺構検出に入る。細溝の他は顕著な遺構なし。
7・8　北端の排水溝で人頭大の石2個がみつかる。東二坊々間路西側溝（SD4699）の護岸か。
7・11　西端の排水溝掘下げ。北端ST09区で人頭大の石発見。七・八坪間の小路北側溝の護岸か。
7・12　西から灰褐色土を掘下げて検出にかかる。西の排水溝で20尺間隔の柱列（SA4199）みつかる。
7・13　08ライン付近まで進む。南半の遺物包含層は、薄く、灰褐色土と暗灰色土を区別して発掘することができない。灰褐色土中には、青磁や瓦器が含まれ、古墳時代（6世紀）の須恵器も散見される。薄く暗灰色土が残るためか西側溝は未検出。
7・15　降雨のため午前中休止。北端で西拡張区（東西30m、南北10m）を設定し、重機による盛土・耕土・床土の除去開始。
7・18　SG08区では地山上で坊間路西側溝の西肩を検出。
7・19　灰褐色土の除去は東端まで到達。東の排水溝掘下げ。SP07区で黒曜石出土。長野県和田峠産か。折返して暗灰色土を掘下げる。北端の排水溝の土層観察によると、暗灰色土は坊間西側溝を覆う。
7・20　暗灰色土を除去すると、07区で西側溝東肩がみえはじめる。
7・21　Jライン畦以北でも西側溝の東肩を検出する。西端のR～T区では石列が出はじめ、坪境小路と坊間路西側溝の交点に護岸がなされていたことはまちがいない。09区では暗灰色土下から南北柱列（SA4199）を検出し、掘下げる。
7・25　西側溝のほぼ全体を検出。Jライン畦南でサブトレンチを入れて土層観察。北端の西拡張区の床土除去。
7・26　西拡張区の南から灰褐色土面で遺構検出開始。午後から暗灰色土を掘下げて検出。西側溝はJライン畦南での掘下げを終了し、土層図作成にかかる。
7・26　西拡張区では七・八坪間の坪境小路南側溝（SD4359）出はじめる。
7・28　西拡張区では小路北側溝（SD4361）出はじめる。
7・29　北側溝検出。西側溝ではSO区に土層観察用のサブトレンチを入れる。
7・30　西側溝のSC区にもサブトレンチを入れて土層観察。西拡張区は15ライン上のコンクリート基礎をとりのぞき、15～17区で灰褐色土を掘下げる。
8・1　西拡張区15～17区では小路西側溝とこれらより古い南北細溝を検出。
8・2　西側溝はG・H区の上層（茶灰色土）から掘下げ開始。この土は自然堆積でなく人為

的に埋戻した土のようである。西拡張区は小路南側溝の上層掘下げ開始。

8・13　小路南側溝（SD4359）は空撮に間にあわないため、15ライン以西について１段低く掘下げるだけとし、北側溝にかかる。西側溝の発掘は一時休止する。

8・17　西拡張区の清掃。11：00～第186次補足調査区とあわせて空撮。午後、再びベルトコンベヤーを入れ、小路両側溝の上層を掘下げる。上層はともに下層より北に寄っている。「冨」の墨書土器が出土。

8・18　小路側溝上層を完掘。空撮のターゲットを利用して平面実測。

8・19　小路側溝下層の発掘。３：00～写真撮影。

8・20　小路側溝下層の実測。

8・23　小路側溝下層の実測完了。10ライン以西の調査区は第186次補足調査区とともに工事側に引き渡す。

8・24　小路側溝の土層図作製のため、10ラインにトレンチを入れる。その結果、小路両側溝の下層より古い２個の柱穴（SB4740）を検出。10ライン以東で小路と西側溝の関係を精査し、掘下げる。小路南側溝上層は08区で北折して北側溝上層に合流し、西側溝の埋土を横切って東に延びること、石列はこれらの上層溝に伴う護岸であること、小路両側溝の下層は西側溝に注ぐことなどが判明。休止していた西側溝の掘下げ再開。

8・25　SR09区で小路南側溝の上層に注ぐ南北溝（SD4744）を検出する。埋め戻した西側溝の代替であろうか（のち、七坪東面築地東雨落溝と判明）。だが、浅く狭い。西側溝は、Ｊライン畦以北Ｑ区までの上層を掘下げが終り、南半に移る。

8・26　西側溝はＪライン畦以南の上層（茶灰色土）を掘り終り、この下の灰色粘土も掘下げる。灰色粘土は薄く、土器の量は少ないが、完形品が目立つ。平城宮II～IIIのようであり、西側溝は奈良時代後半には開いていなかった可能性が高い。

8・27　西側溝はＪライン畦以南を中層（暗灰色粘土）まで掘下げにかかる。

8・29　西側溝の南端RR～SC区では下層（暗灰色砂）の発掘にかかる。木彫りの墨書人形、木簡、銅銭、骨など出土。RT～SAにかけての東岸法面に上面では確認していなかった大きな落込み（旧河川の埋戻し）のあることが判明する。

8・30　西側溝はSB～SQの中・下層を掘下げ。SQ区で大型の土製品出土。鴟尾か。

8・31　西側溝南半ほぼ完掘。前日、鴟尾かと思われたものは家形埴輪であった。

9・3　西側溝北半の中・下層の掘下げ。北端の坪境小路上層の合流地点をほぼ完掘。

9・6　西側溝は北端近くのSR区の掘下げ。坪境小路上層の合流点付近の平面実測。午後、

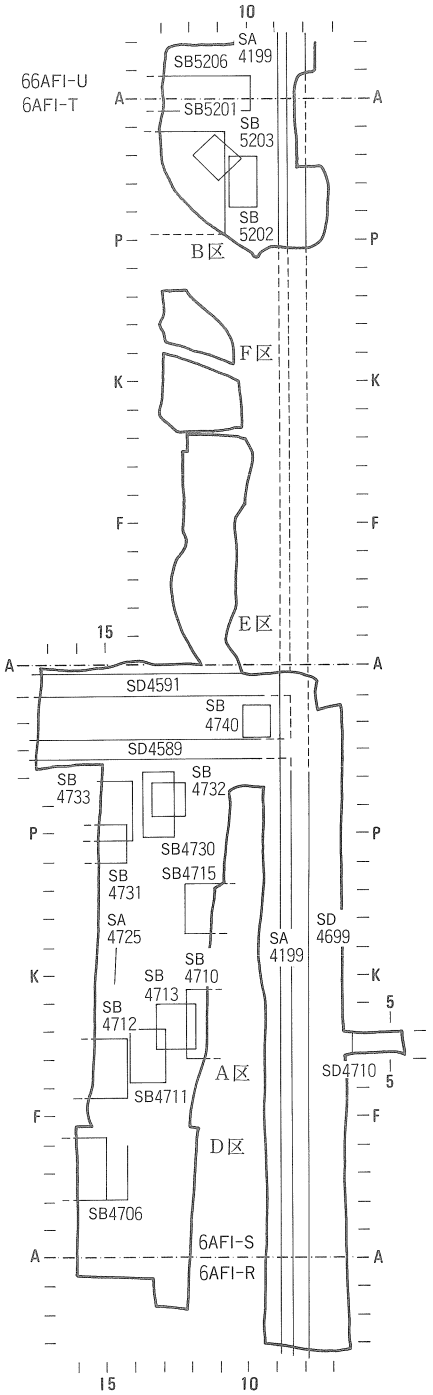


Fig. 9　第193次（A・B・D～F）
調査区遺構略図　1：800

雨で中止。

9・7　坪境小路上層の実測と写真撮影。09ライン上の南北塀（SA4199）のつづきをたしかめるため調査区南端を拡張。

9・8　南拡張区では柱穴がなく、菰川の旧流路を検出。

9・9　西側溝SR区以北と、坪境小路両側溝下層の掘下げ。

9・12　西側溝完掘。

9・13　午前中、清掃。午後、写真撮影。

9・14　11：00～空撮。午後、調査区の北・東壁とＪライン畦の土層実測にかかる。

9・15　二坊々間路の東側溝を確認するため、H区に東拡張区（東西約７m、南北約２m）を設け、小型重機で床土まで除去。

9・17　東拡張区の遺物包含層除去。

9・19　東拡張区で南北溝（SD4701）があることがわかり、上層から掘下げ。二坊々間路東側溝のようで、西側溝より広い可能性がある。

9・20　東拡張区の南北溝からは土器が多く出土。年代は奈良時代後半で西側溝と様相が異なる。09ライン南北塀（SA4199）の柱穴断割りと実測。RR08区では菰川旧流路と蛇行溝（SD4150）を発掘。坊間路上では旧流路は埋められているが、西側溝以西では蛇行溝として機能していたようである。

9・24　東拡張区の平面・土層実測および写真撮影。東南部の旧流路と蛇行溝の図面作成と写真撮影。

9・25　資材の片付け。南半部に砂入れと同時に重機による埋戻しはじまる。第193次A区調査終了。

D区

8・1　調査区設定（南北約57m、東西10～12m）。工事の都合上、重機によってほぼ地山面まで排土。

8・3　地山面で遺構検出開始。北半がほぼ終る。東辺に大型の柱穴列あり。

8・4　東辺の大型柱列は倉庫群（SB4710・4715）になる。SO14区で土師器甕を埋めた方形のピット検出。

8・5　北約２／３の検出をほぼ終る。打合せの結果調査期限は13日までと決まる。

8・6　コンクリート基礎を撤去するため遺構面の全体にシートをかける。

8・8　柱穴を精査して掘下げたのち清掃。

8・9　午前中、写真撮影。

8・10　11：00～空撮。午後から柱穴の断割りと井戸（SE4720）の掘下げ。

8・11　SC13区の井戸（SE4705）掘下げ開始。

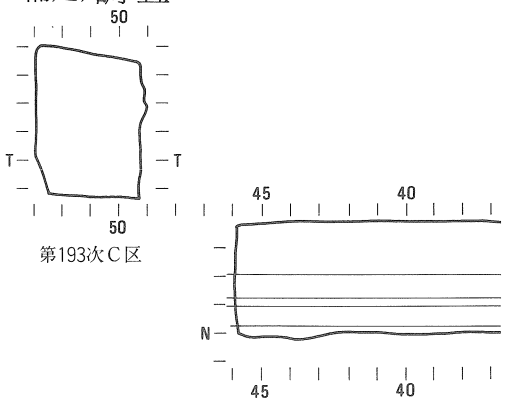
8・12　井戸２基の掘下げと実測および写真撮影。

8・13　SC13区の井戸は昨夜の雨で崩壊。図面と写真撮影は諦めて井戸枠を取上げる。

G　第193次（B・C・E・F区、B区補足）調査

6 AFI区T・U地区

1988年７月２日～1988年12月８日（B区）
1988年９月16日～1988年９月29日（C区）
1988年８月26日～1988年９月３日（E区）
1988年１月27日～1989年２月14日（B区補足）
1989年５月16日～1989年５月29日（F区）
1989年６月30日（F区）



第193次C区

B区

7・12　調査区（南北約25m、東西９～12m）の東側に排水溝を掘り、西にむけて床土除去を開始する。東端には遺物包含層があるが、10区付近からは、遺物包含層がなく、地山（黄褐色粘質土）があらわれる。

9・7　床土の除去は西端まで到達する。折返して遺構検出。I区以南は地山で、柱穴多し。Ｊ区以北には灰褐土が薄く残り、これを掘下げて検出。N区で二条大路南側溝（SD5150）南肩が出る。

9・8　11区まで進む。南側溝は幅が6mほどある（のちSD5100と平行すると判明）。

9・9　10区まで進むが、遺構は極端に少なくなる。木樋暗渠（SX5351）があるので、築地塀があったのであろう。09区で南北溝（SD5353）検出。築地東雨落溝か。二条大路南側溝と埋土が連続しともに上下2層がある。

9・12　東南部で東二坊々間路西側溝がかかったので、東に1mほど拡張。二条大路南側溝の上層を掘下げると、東西大溝がO区とN区の2条（SD5100とSD5105）になった。

9・15　東二坊々間路西側溝掘下げ。O区の東西大溝（SD5100）最上層を二条大路南側溝暗灰褐色砂土として掘下げる。

9・16　O区の東西大溝の中層を炭層、下層を黒灰色粘土として掘下げ。炭層の下は木屑の堆積がある。

9・17　O区の東西大溝の木屑層は厚い。木簡も続々と出土する。土ごとコンティナーに入れて持ち帰ることにする。西側溝から木簡2点が出土。

9・20　O区の東西大溝では09区の木屑層から木簡が折り重なるようにして出土。

9・26　先週後半の降雨で各所が崩壊。とくに西側溝とO区の東西大溝の被害は甚大であった。排水と修復に終始。

9・28　9：00～写真撮影。11：00～空撮。午後から調査区南・西壁の土層図作成と柱穴の断割り調査に入る。

9・29　09区の築地東雨落溝（SD5353）完掘。09ライン上の20尺間隔の南北塀（SA4199）の柱穴をUK区で新たに検出。八坪の北面位置を探すが、柱穴はなかった。

9・30　調査区西南隅の柱列（SB5200）は深さ1m以上と立派であった。

10・2　柱穴の断割り調査を終了し、砂入れ。

10・3　調査班交替。これまでの調査区の南に新たに調査区（南北約33m、東西8～15m）を設定し、重機で床土まで除去はじめる。また、O区の東西大溝を追求して西にも道路にそって狭長な調査区（東西約32m、南北4～6m）を設定。テント移動。

10・11　南区の地区杭打ち。ベルトコンベヤー設置（西辺中央部UC11区に浄化槽があり、ベルトコンベヤーの設置は苦心する）。

10・12　南区の周囲に排水溝を掘る。

10・13　B区以北について東端07区から灰褐土除去。西区の重機による排土開始。

10・14　11区まで進む。西側溝（SD4699）と八坪東面築地の東雨落溝（SD5353）が出る。また、南北塀（SA4199）も検出。UC10区では東西方向の木樋暗渠（SX5352）の底板が現われる。

10・15　D～G区は11区まで進む。UF11区の大土坑は井戸（SE5220）か。南北小溝はあるが、柱穴はないようだ。

10・17　D～G区は西端まで進み、2個の柱穴（SB5200）を検出。B区以南にベルトコンベヤー設置しなおす。

10・19　B区以南は、東端から一部残る暗灰土を掘下げ、西側溝と築地東雨落溝を検出。

10・20　UB区以南は09～11区まで遺構検出。柱穴出はじめる。

10・21　UB区以南はほぼ西端まで進む。比較的暗灰土が厚くこれをとって検出。大型の建物（SB5201）あり。45°ほど振れる建物（SB5203）

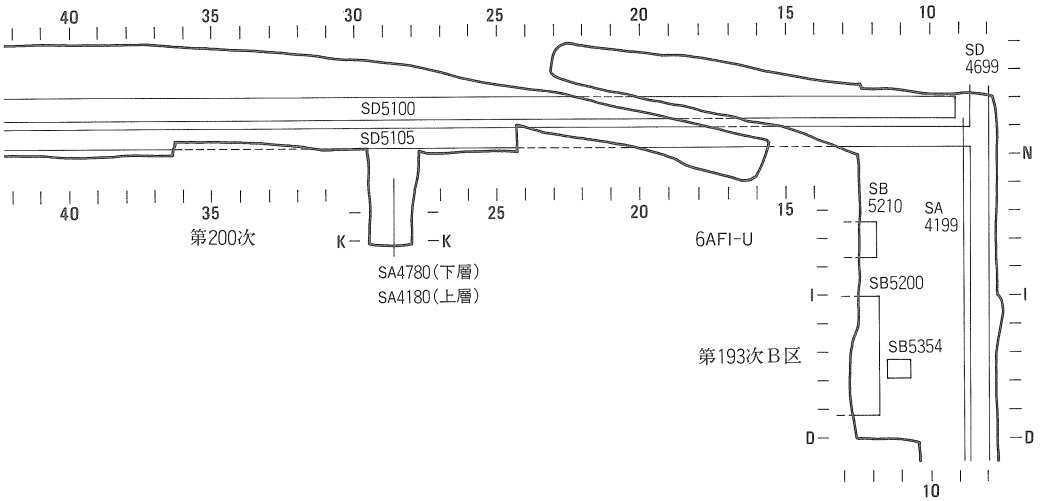


Fig.10　第193次（B・C）、第200次調査区遺構略図　1：800

もある。
10・22　TT12区付近で幅の広い斜行溝（SD5230）検出。
10・24　西から遺構の掘下げを開始する。斜行溝は土師器小型丸底壷を含み、古墳時代（5世紀後半）か。TS12の土坑は井戸（SE5205）と判明する。
10・25　西区にベルトコンベヤーを設置し、暗灰土除去にかかる。暗灰色土下にO区の東西大溝（SD5100）の南肩がみえる。
10・26　西区の東西大溝の両肩ほぼ出る。東端UD13区から掘下げ開始。
10・27　西区の東西大溝はUD13区で木屑層にかかる。木簡も多し。木屑は50箱分取上げ。
10・28　西区の東西大溝はUD14～21区の土層の掘下げにかかる。
10・31　西区の東西大溝の掘下げはUD12区に進む。木簡約10点出土。南区では東面築地の東雨落溝掘下げ。UF11区の大土坑は井戸（SE5220）と判明。
11・2　南区では西側溝の掘下げに入る。
11・4　南区で柱穴探し。建物（SB5202）まとまる。
11・5　2：00～3：30現地説明会(参加者300名)。西区ではO区の東西大溝で断面に木簡がのぞいている状態を見せる。好評であった。
11・7　南区では西側溝掘下げ。
11・8　清掃を開始する。あわせて遺構の見落しがないかをチェック。西区のO区東西大溝は最上層まで完掘する。
11・10　午後、空撮用の標定点打ち。
11・11　11：00～空撮。
11・14　遺構の写真撮影。
11・15　南区では西側溝の掘下げ。下層の暗灰砂から木簡約10点、曲物や挽物皿など出土。
11・17　南区は西側溝掘下げ。西区はO区の東西大溝（SD5100）の炭層と木屑層の掘下げに入り、木簡多数出土。「神亀五年」の墨書土器出土。
11・18　西区の東西大溝掘下げ継続。
11・22　西区の東西大溝は東端の畦近くを残してほぼ完掘。
11・28　西区の東西大溝、南区の西側溝の写真撮影。柱穴の断割り調査に入る。
11・29　西区の東西大溝の土壌採集（粉川昭平・金原正明両氏）。
11・30　南区の西側溝と西雨落溝の実測。大型の柱穴（SB5200）の柱根は太い。
12・1　西区のO区東西大溝の土層観察用畦はずし。
12・5　柱穴の断割り調査が終了する。南区の井戸2基（SE5205・5220）の掘下げ。両者とも土器多く、うち1基（SE5220）から木簡2点出土。
12・8　器材撤収に入る。井戸（SE5205）の底から三彩の小型双耳瓶、斎串、漆紗冠などが出土。砂入れ後、埋戻して調査終了。

C区

9・16　調査区（南北約13m、東西約9m）の四周に排水溝を掘り、南S区から灰褐色土除去し、検出開始。
9・17　南半で東西及び南北方向の溝を検出。
9・20　北端まで到達。折返して遺構掘下げ。調査区の東西両端に南北溝各1条がある程度で、顕著な遺構はない。
9・26　先週後半の雨のため水没。終日水替え。
9・27　清掃。
9・28　10：00～写真撮影。11：00～第193次B区とともに空撮。午後、調査区の土層実測。
9・29　土層実測を終え、調査終了。

E区

8・26　第186次北区の東方の調査予定地外で重機による掘削にかかった、木片を多量に含む土坑（SD4750）を調査員が夕刻に発見。木片のなかに木簡があることから、掘削が深く及ばないよう指示して帰庁。
8・27　打合せにより、土坑の発掘にかかる。深さ約30cmの土坑は上部が掘削され10cmほどしか残っていない。南端から土ごと取上げ。瞬く間にコンティナーの山積。10時半頃、土坑の範囲確認のため重機で北側の上土を除去したところ、東西3m以上、南北は6～7mあって北と東に延びることがわかる。本日、土曜日であるが、午後も木簡と木屑の取上げを続行。木簡の内容から長屋王家の家政機関に関わるとわかる。土層観察用畦を残して南半はほぼ掘下げを完了し、写真撮影。2時半頃、遺構の東への広がりを確認するため、再度重機で拡張。幅3mほどとわかり、夕刻まで掘下げ継続（明日、日曜日のため休む）。
8・29　朝、現場につくと、工事者側が重機でデパート建設地内の範囲まで、重機で遺構の上面まで掘削していることがわかり驚く。幅約3mの溝状の遺構が20mほど北にのび、工事範囲外に続く。急拠、地区杭を打ち、TB11区～TH

11区の遺物の取り上げにかかる。北端に層位を確認するためのサブ・トレンチを入れようとするが、木片が重積なって掘下げることができない。遺物の取上げは上から、茶褐色粘質土、暗褐色粘質土、木屑層とした。最上層は別にしても、基本的には木屑層まで一気に埋めているようである。

8・30　掘下げ継続。「長屋親王宮」木簡出土。調査区のすぐ西は、工事による掘削が深く及び、断崖となる。重機が走りまわる粉塵のため、作業員はマスクをつけて発掘にあたる異常な光景となった。

8・31　SD11区～SH11区の掘下げ。土ごと取上げたため、午前と午後それぞれトラック1台分となる。現場で見つかる木簡（完形品ばかり!!）も多く、用意した容器も底をつく。「侍従」「帳内」の木簡が出土。建築用板材かと思われる長大な木簡（のち「氷室」木簡と判明）まで出土。想像を絶する木簡群となりそうだ。

9・1　TH11区～TG11区を完掘。手をつけていなかったTC11区や畦部分も掘下げる。本日、直木孝次郎氏来訪。現場で取上げた「百済郡車長」について説明を受け、これだけでも一つの論文が書けそうとわかる。本日の取上げ量もトラック2台分。午前中には北壁の土層面の剝ぎ取り転写を実施。

9・2　TB11区、TC11区、TE11区を掘下げ、木簡溝を完掘。本日の取り上げ量はトラック1台分強。総計は900箱をこえた。3：30～遺構の写真撮影。

9・3　遺構平面図と、北壁の土層図を作成。工事に関わる掘削による破壊を避けるため、北端を1mほど拡張して木屑層の遺物を取上げる。昼前に調査終了。

B区補足

1・27　調査区（南北約20m、東西約6m）を第193次B区の東に設ける。第193次B区で検出したO区東西大溝（SD5100）と東二坊々間路西側溝（SD4699）との関係を明らかにするのが目的。重機による床土までの除去終了。ベルトコンベヤーを設置。

1・30　遺物包含層を除去。西側溝を検出し掘下げはじめる。

2・1　B区とのつながりを明らかにするため一部西に拡張。09ライン上で南北塀（SA4199）を検出。八坪北面築地南雨落溝（SD5094）と西側溝の合流部分も検出。

2・2　西側溝上層および中層の掘下げ。

2・6　西側溝下層の掘下げに入る。

2・8　西側溝の北西部を精査。O区東西大溝（SD5100）は、西側溝と合流せず、その手前約1mほどで止まること、この南のN区東西大溝（SD5105）は3層あり、下2層が西側に注ぐが、最上層は西側溝を埋め戻した上を通して東流することを確認（従来、O区東西大溝を二条大路南側溝、N区東西大溝を築地北雨落溝と呼んできたが、以後、前者を東西大溝、後者を二条大路南側溝と呼ぶようになる）。また、09ライン上の南北塀は、八坪の北面築地位置よりさらに北に柱穴を検出し、これがO区東西大溝より古いことを確認した。

2・13　清掃。11：00～空撮。午後、写真撮影。のち、西側溝に残していた土層観察用畦を掘下げる。木簡2点出土。

2・14　西側溝上の畦を掘下げ、調査終了。

F区

5・16　第193次E区の北に調査区設定（南北約14m、東西1．5～6m）。長屋王家木簡溝（SD4750）の範囲確認と完掘が目的。重機で床土までの排除にかかるが、水道管やヒューム管などがあり難航。ヒューム管は撤去できず、調査区は南と北に2分される。

5・18　テント設営、機材搬入。調査区内のK区を横断するヒューム管下の土が崩れないよう板で土留め。地区杭打ち。

5・19　南区では南端TI11区で遺物包含層を下げて木簡溝を検出。

5・22　南区の遺物包含層を下げる。木簡溝は、TJ区でとまり、北にのびないと判明。掘下げ開始。東壁沿いに灰褐色土面から掘込まれた穴がある。柱穴か。北区も遺物包含層を下げて検出開始。

5・24　木簡溝の掘下げ続く。南区では北西部において暗灰色土面から掘込まれた土坑を、北区北端では暗灰色土面から掘込まれた柱穴を検出する。

5・26　木簡溝の掘下げ終る。底で南北方向の旧流路（砂層）検出。遺構および土層の実測。

5・29　遺構および土層の実測と写真撮影（南からの全景は建設が進むデパート屋上から）を行う。木簡溝上の土層観察用畦を掘下げたのち、砂入れ。

6・30　工事の都合上、第193次E区との間（約0.3m）に残った木簡溝の発掘にかかる。重機で上土を除去。木簡溝の掘下げは一日で終了。

H　第195次(北・南区)調査

6 AFI区T・U地区
1988年10月25日～1989年1月12日（北区）
1989年2月14日～1989年3月10日（南区）

北区

10・25　調査区設定(東西約45m、南北約23m)。西半部は第190次調査用のプレハブがあるので、東半部の耕土を重機で除去しはじめる。

11・2　ベルトコンベヤーを設置して、西から床土除去にかかる。第190次調査と並行であり進まない。

11・17　地区杭打ち。

11・21　調査区西半部の耕土と床土を重機で排除。東半部は東から灰褐色土を下げて遺構検出にかかる。

11・28　西半部の地区杭打ち。

11・29　本格的な検出に入る。58～60区。東辺中央部には焼土や炭粒の混った層が一面に堆積する(土坑か)。北では59区で重複する南北柱列(SB5050)、南では大型の柱穴群（SB5020）出はじめる。

12・1　63ラインまで進む。63ライン付近で重複する南北方向の柱列検出。うち1条(SA5030)は南半の建物(SB5020)の西妻に取付くようである。西端からも灰褐色土の掘下げ開始する。

12・3　東からの検出は66ライン畦まで進む。TS65区に大きな落ち込みがある。井戸か。

12・5　66ライン畦以西では新たに建物1棟（SB5160）ほぼまとまる。南辺では東西方向の柱列（SB5130・5132）を2条検出。

12・6　66ライン畦から折返し。精査しながら遺構を掘下げる。

12・12　東半は59区まで遺構の掘下げ。59・60区、TQ～TT区の炭混り大土坑上で、これより新しい建物（SB5000）がまとまりはじめる。北辺の建物（SB5050）もまとまる。

12・14　東半の遺構の掘下げほぼ完了。66ライン畦以西の検出にかかる。

12・16　西半の中央部で南北棟1棟(SB5170)とこれより古い南北塀（SA5190)、およびこの西で東西棟（SB5195）を検出。

12・19　西端から遺構の掘下げは90%完了。TO69区の大土坑は井戸（SE5140)。井戸枠は一木を刳り抜いたものらしい。

12・20　清掃開始。

12・22　11：30～空撮。午後、写真撮影。

12・23　写真撮影。

1・7　柱穴の断割り調査開始。

1・9　TO69区の井戸掘下げ。底で「宝亀七年」の木簡1点と「官厨」の墨書土器出土。

1・10　TT65区の大土坑掘下げ。井戸枠は抜き取られてない。調査区四周の土層図作成。砂入れ80%完了。

1・12　井戸の掘下げ終了。砂入れ後、埋戻して調査終了。

南区

2・14　調査区（東西約35m、南北約15m）の四周に排水溝を掘る。南端I区から薄く残る遺

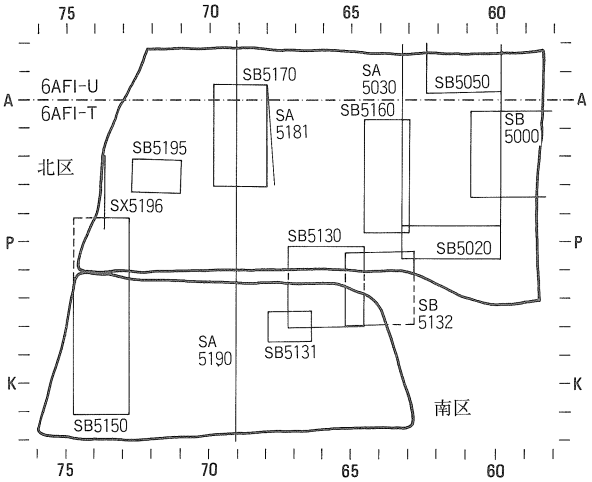


Fig.11　第195次（北・南）調査区遺構略図　1：800

物包含層を除去して遺構検出にかかる。

2・15　Kラインまで進む。72区で第195次北区から続く建物(SB5150)の大きな柱穴を検出。

2・20　Lラインまで進む。西辺の建物は柱穴が順調に出る。東では顕著な遺構がない。

2・21　北端N区まで到達。東のM・N区では小さな柱穴を多数検出。

2・23　北から折返して精査と掘下げ。

3・2　TK65区の井戸(SE5135)掘下げ開始。

3・3　調査区南・西壁の土層実測。

3・8　11：00～空撮。午後から柱穴の断割り調査に入る。TI72・TM72の柱穴（SB5150）から礎板。羽子板状である。茅葺き屋根の整形に用いる叩き板か。

3・10　井戸枠と柱根の取上げ。砂入れ後、埋戻して調査終了。

I　第197次調査

6AFI区T・U地区
1988年12月13日～1989年3月17日

12・13　東半の調査区（南北約60m、東西約30m）について地区杭を打ち、薄く残る包含層の除去をはじめる。西は56ライン畦まで。重機による上土の除去はすでに完了。デパート建設に伴う資材置場・駐車場造成に関わって土壌硬化剤を使用したため、東半では遺構面に達するまで一緒に土がとれてしまった。

1・7　調査班交替。南から遺構検出にかかる。本日早朝、昭和天皇逝去。

1・9　TRラインまで進む。一・八坪間の坪境小路両側溝（SD4909・4911）は2時期ある。上層のみ掘下げ。第186次北II区から続く2条の南北塀を探す。49区南北塀（SA4860）は小路東側溝の埋土によってみえない。

1・10　TSラインまで進む。東端のD～R区で大きな柱穴列。東西棟の西妻か（SB4991）。第195次から続く建物の柱穴はまだでない。

1・11　UAラインまで進む。54ライン上の南北塀（SA4870）は北に続きはじめる。

1・12　UCラインまで進む。東辺のUBラインの北と南で柱列各1条（SB4960・4965の各南妻）検出。北端からも遺構検出をはじめ、UO区で東西大溝検出（SD5100このときまだ二条大路南側溝と呼ぶ)。一部掘下げ、「左大舎人」の木簡出土。49区では途切れる。

1・13　南からはUDラインに達し、折返して精査と掘下げにかかる。東辺では建物（SB4960）がほぼまとまる。この内側では小さな建

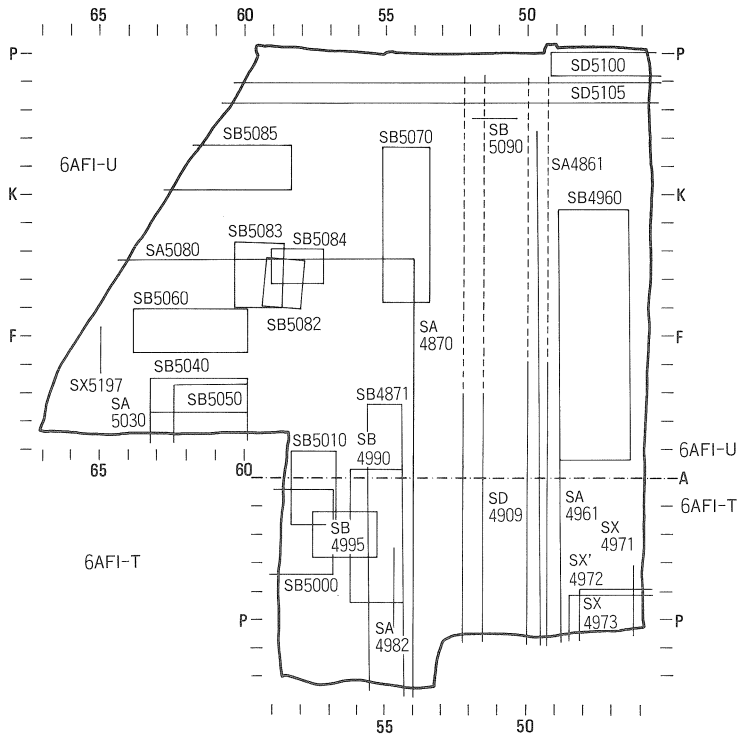


Fig. 12　第197次調査区遺構略図　1：800

物（SB4965）まとまる。西辺では新たに南北の柱列（SB4871）を発見。北からはUN～UO区間で東西溝（このとき築地北雨落溝とみる。のち、二条大路南側溝SD5105）検出。瓦が落下した状態で埋っている。UL～UM区間では築地南雨落溝（SD5094）を検出した。また、UM51・52区で二条大路に開く掘立柱門（SB5090）も検出。

1・14　本日土曜日。はじめて土曜閉庁開始のため調査なし。

1・17　北面築地南雨落溝は新旧2時期があると判明。UC53～54区の土坑（SK5074）から木簡5点出土。

1・18　49区の南北塀（SA4860）と54ラインの南北塀（SA4960）は柱穴をすべて検出。前者は北面築地に取付くか、後者はUT区で西折するようである。西辺中央では第195次調査区から続く建物（SB5000）まとまり、3面庇付きで、身舎3×2間の東西棟と判明。

1・25　清掃開始。

1・27　空撮用の標定点打ち。写真撮影をはじめるが降雨で中止。56ライン畦以西（以下、西区とする）にベルトコンベヤーを設置して一部残る床土と遺物包含層を下げはじめる。

1・30　水替えと清掃。11：00～写真撮影。12：30～第198次A区とともに空撮。2：00～4：00写真撮影。のちO区東西大溝（SD5100）の掘下げ。

1・31　O区東西大溝を掘下げる。午後は第1回長屋王邸検討会のため休止。

2・2　O区東西大溝木屑層の掘下げ。木簡多数。蓮の実が数個出土。

2・3　O区東西大溝木屑層の掘下げ。漆紗冠、篦を多数入れた籠、ウリの種子なども出土。

2・4　2：00～現地説明会（参加者約150名）。

2・6　北端を一部拡張してO区東西大溝の北肩を出し掘下げをはじめる。。柱穴の断割り調査を開始。

2・13　柱穴の断割り調査を続行。調査区東壁の土層を検討。本日、第193次B区補足調査の空撮にあわせ、O区東西大溝の完掘後の空撮も行う。

2・14　北門の南で、北面築地南雨落溝に施された護岸用の杭を発見し、写真撮影。56ライン畦以西の西区について北から遺構検出を開始。UN区の東西溝上に築地から落下したと思われる瓦群を検出。

2・15　49区南北塀（SA4860）の柱穴は北面築地南雨落溝上層より新しいことなどを確認。井戸の掘下げを残して第197次東半の調査は一応終了し、西区の検出に主力を移す。56ライン畦にベルトコンベヤーを並べ直し、54・55区も再精査。北半で建物（SB5070）の西側柱列を検出する。この建物は北面築地南雨落溝上層より新しい。

2・20　連日の降雨のため進展しない。56・57区で検出。柱穴が出はじめるが、まだまとまらない。

2・21　東半の調査区ではO区に東西大溝があり、西区でもこの位置で溝があるのではと考えたが、ないと確定。

2・22　58区まで進む。遺物包含層が残るためか、遺構はよくみえない。

2・28　62区まで進む。午後、第2回長屋王邸検討会のため作業休止。

3・2　西端まで到達。折返して遺物包含層を下げて検出。大きな土坑も掘下げる。

3・6　56区まで進む。57区の南北溝（SD5093）は北面築地南雨落溝と一連である。のち南北溝を埋戻した折にその北端には土留め用板をあて杭を打っている。

3・7　H区で東西塀（SA5080）を検出。東区で検出した54ラインの南北塀（SA4870）はさらに1間北に延びてこの東西塀と連結すると判明。

3・8　11：00～第195次南区とともに空撮。午後、写真撮影。

3・9　柱穴の断割り調査を開始。

3・13　東区のUE54区の井戸（SE5075）を掘下げる。西区では西壁の土層実測もはじめる。

3・14　UE54区の井戸より古い土坑（SD5074）を掘下げ。木簡出土。

3・16　UE54区の井戸の掘下げと西区北壁の土層実測。00：00～記者発表。

3・17　井戸完掘し、調査終了。

3・18　2：00～第195次南区とともに現地説明会（参加者約200名）。

J　第198次（A～C区）調査

6AFI区U地区　6AFF区J・K地区
1989年1月19日～1989年2月3日（A区）
1989年3月28日～1989年5月16日（B区）
1989年5月8日～1989年5月15日（C区）

A区

1・19　調査区（東西約23m、南北約13m）に地区杭を打つ。重機による床土までの排土はすでに完了。

1・21　テント設営。ベルトコンベヤーを南北に並べ、西に排水溝を掘る。

1・24　西端6ラインから遺物包含層を除去して遺構検出を開始する。東南部には新しい撹乱がある。7・8ライン間で東二坊々間路西側溝（SD4699）の延長部分を検出する。この溝はある時期に二条大路上を縦断していたことになる。北端F区では東西溝の南肩を検出する（のち、東西大溝SD5300とわかる）。南端では西側溝より古い東西方向の溝状遺構を検出。遺物が出土しておらず時期は不明。

1・25　西側溝の上層を掘下げる。木簡出土。

1・30　12：30～第197次調査区とともに空撮。

1・31　西側溝の中・下層を掘下げる。中層では木簡多し。下層では遺物少ないが、「養老六年」の木簡が出土。

2・1　西側溝の掘下げは完了する。午後、写真撮影。

2・2　西側溝のレベルを実測。

2・3　調査区東・南壁の土層実測。調査終了。

B区

3・28　L字形の調査区（南北約48m、東西12～25m）の周囲に排水溝を掘る。地区杭打ち。重機による床土までの排土はすでに完了。

3・31　ベルトコンベヤーを壁にそってL字状に並べ、西にむかって灰褐色土の除去に入る。午後、雨で作業休止。

4・1　調査班交替。南辺を重機で拡張し、第198次A区と重なるようにする。東端から灰褐色土を除去し、暗灰色土面で遺構検出に入る。北辺KA・KB11区で側板をもつ南北溝（SD5251）を検出。南辺部JH・JJ区では瓦が列状に出る。

4・3　J区以北は、暗灰色土を削って西端16区まで到達するが、顕著な遺構はない。折返しは暗灰色土を掘下げて検出にかかる。北では地山（黄灰色砂）面が出てくる。Iライン付近では五坪南面築地（SA5245）の基底部らしい黄褐色粘質土面がのぞく。この北Jライン上では瓦列がある。

4・4　暗灰色土の除去は13ラインまで進む。N区以北は砂地で暗灰色土を埋土とする柱穴や溝などが出はじめる。N区以南は炭混り暗灰色土がやや厚く残す。南面築地の北では瓦列がつづく。南ではF区で東西大溝を検出（SD5300この時点ではまだ二条大路北側溝とみる）。この

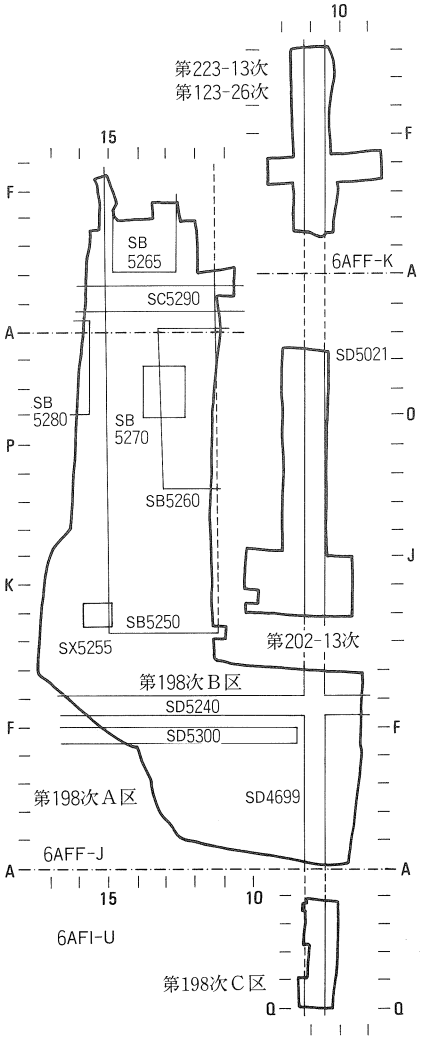


Fig.13　第198次、第123－26次、第202－15次、第223－13次調査区遺構略図
1：800

溝は、第198次A区で検出している、07区の二坊々間路西側溝（SD4699）の北延長部分の手前1mほどで止まることがわかる。

4・5　北半部は13～15区を精査する。Nライン以北の15ライン上で、柱間8尺の南北柱穴列（SB5250西庇）と、この西で南北溝（SD4243）を検出する。F区の東西大溝は西端近くまで検出する。

4・7　K区以北では14ラインで柱穴列を検出（SB5250入側柱列）。重複する柱穴があるが、先後関係は明らかでない。砂地であるので土壌硬化剤を散布。

4・11　K区以北の暗灰色土の掘下げは、東端11区まで進む。東辺南半を拡張して側板を用いた南北溝（SD5251）の全容を出す。南辺を精

査。G区で東西大溝（SD5240）、07区で北からくる二坊々間路西側溝（SD5021）を検出し、これらが一連であることからG区の東西大溝が二条大路北側溝と判明。

4・12　K区以北は東から折返して精査。13ラインまで進み、重複する柱穴多数を検出。Jライン上の瓦列を露出させる。

4・14　Jライン上の瓦列を11：00～空撮。J区以北は精査。

4・15　Jラインの瓦列をはずす。以北ではQ～R区、12・13区で3×3間の建物（SB5270）まとまる。

4・18　J～L区、12～16区の炭混り暗灰色土の掘下げ。I区で東西溝2条（SD5245・5246）を検出。このうちの1条（SD5245）は、他の1条（SD5246）より新しい16区南北溝（SD4243）とつながることがわかる。

4・20　南辺の二条大路北側溝と東二坊々間路西側溝とのつながりを精査。この結果、最古の二条大路北側溝（SD5240）は北の東二坊々間路西側溝（SD5021）とつながって東流すること、最古の二条大路北側溝より二条大路上の西側溝（SD4699）が新しく、水は南流すること、F区の東西大溝（SD5300）は最古の二条大路北側溝より新しいこと、のち二条大路北側溝は再び東流することなどがわかる。これを確かめるため十文字にサブ・トレンチを入れる。

4・22　調査区東南部の東を拡張。K区以北では12区で桁行17間をこえる長大な南北棟の東側柱列（SB5250）を検出。この建物の西の南北溝（SD4243）を掘下げる。

4・25　長大な南北棟（SB5250）と3×3間の建物（SB5270）について前者が新しいと判明。南辺の溝の重複を確かめるサブ・トレンチを掘下げ続行。西側溝（SD5021）から「天平十九年」の木簡出土。

4・26　KA・KB区に並ぶ東西柱列（SC5290）の存在を確認。F区東西大溝を掘下げる。木屑層で止める。

4・27　JO区以北を精査。東ではJO～JT区で西廂付きの南北棟（SB5250）、西ではJR～KA区で南北柱列（SB5280）まとまる。南のF区東西大溝（SD5300）から「天平五年」の木簡出土。

4・28　ベルトコンベヤーを撤去して清掃。11：00～空撮。午後、写真撮影（全景は西隣のビルと、東の奈良市水道局から）。

5・1　南にベルトコンベヤーを並べ、F区東西大溝の掘下げ。北東隅の東を拡張して長大な南北棟（SB5250）の東庇がつくか否かを確認。JJ13区の大土坑掘下げ。

5・6　2：00～現地説明会（参加者約200名）。

5・8　柱穴の断割り調査を開始。南辺では溝の断割り調査継続。

5・9　南辺の溝の先後関係について平城宮発掘調査部員が集まって検討し、4月20日の観察にほぼ近い見解で一致をみる。

5・11　10：00～小雨だが、空撮を強行する。午後、南辺の溝の掘下げにかかる。調査区の北を重機で拡張して、長大な建物（SB5250）の北限を探す。

5・12　JJ11区を拡張して長大な建物の南廂を確認。

5・13　北端をさらに拡張して長大な建物が20間以上になることを確認。Iライン以北は工事側に明け渡す。

5・15　二条大路北側溝と東二坊々間路西側溝の掘下げ。

5・16　二条大路北側溝と東二坊々間路西側溝の掘下げ終了。F区の東西大溝で一部残っていた木屑層を掘下げ。調査終了。

C区

5・8　近畿日本鉄道の架橋下に調査区（南北約12m、東西3m）を設定し、上土を除去。地区杭を打つ。

5・9　遺物包含層を除去し東二坊々間路西側溝（SD4699）を検出。掘下げを開始し、木屑層まで到る。漆紗冠出土。

5・10　西側溝の掘下げほぼ完了。写真撮影後、実測。

5・11　降雨のため東隣の菰川の水位が上昇し、調査区に流入。

5・15　西側溝を完掘。写真撮影後、実測して調査終了。

付　第123－26次調査　　6AFF区K地区

1980年12月8日～1980年12月16日

12・8　調査区設定（東西12m、南北3m）。耕土から除去開始。床土下に中世の遺物を含む暗褐色粘質土、この下に奈良時代の遺物を含む暗灰褐色粘質土がある。

12・9　暗灰褐色粘質土を除去し、調査中央やや西寄りで東二坊々間路西側溝（SD5021）を検出。西端でも南北溝検出。午後、測量用の基準点移動。

12・10　西側溝をほぼ掘下げる。西岸に護岸のシガラミあり。「神亀四年」の木簡、和同開珎などが出土。西端の南北溝も掘下げる。五坪東面築地西雨落溝か。

12・11　西側溝を南に約3m拡張して掘下げる。午後、実測と写真撮影。

12・12　西側溝の拡張部を掘下げる。午後は降雨のため休止。

12・15　西側溝の拡張部分の掘下げ終了。人形出土。１：30～写真撮影。のち砂を入れ埋戻し開始。

12・16　埋戻しを終え、調査終了。

付　第202－13次調査　　6 AFF区Ｊ地区

1990年１月29日～1990年３月３日

１・29　逆T字形の調査区設定（南北約29m、東西５～10m）。重機によって盛土・耕土・床土を除去（～１・30）。

１・31　測量用の基準点移動。

２・２　テント設営、器材搬入。

２・５　北端JR区と、中央JM区にベルトコンベヤーを置き、それぞれ南にむけて灰褐色土除去。11・12ライン間で二坊々間路西側溝（SD5021）の西肩出はじめる。以東は遺物包含層（暗灰褐色土）があり、東肩はでない。

２・７　Mラインに畦を設け、11・12ライン間以東の暗褐色土掘下げ。Mライン以南では10・11ライン間に西側溝東肩を検出。南辺の西端12区では南北溝、東南端では土坑を検出。

２・８　西側溝の掘下げ南から開始。東南隅の土坑は浅い流路となる。

２・９　西側溝の掘下げ。Mライン畦以南では下層の掘下げに入る。Ｌライン付近の西岸に杭列あり。

２・16　西側溝の掘下げは底近くまで進む。

２・19　南辺の西端12区を拡張。西側溝の底には旧流路と思われる斜行溝がある。

２・21　南辺12区の南北溝を浅く掘下げると、西岸と思われる南北の杭列があらわれる。清掃ののち、昼前に調査全体の写真撮影。午後から12区南北溝（SD5033）を掘下げる。

２・22　西側溝西岸Ｌライン付近の杭列と、11区南北溝の写真撮影。のち遺構と土層の実測に入る。12区の南北溝は一部を拡張して精査。溝の両岸には側板があり、杭で止めていること、この溝の西には別の斜めの板材があることなどがわかる。

２・26　12区南北溝の西で斜めの板材と南北方向の板材あらわれる。斜めの板材の延長線で西側溝寄りを断割ったところ、斜行溝と木樋の蓋板かと思われるもの検出。五坪東面築地位置であり暗渠か（SX5034）。

２・27　斜め木樋のつづきを検出して掘下げ。12区の斜めの板材は杭で止め、南北方向の板材につなげていることがわかる。西端にも南北方向の板材の一部を検出。

２・28　12区西端を再拡張し、南北方向の板材２枚が溝（SX5035　のち便所施設と判明）の側板であり、上面に各３個の木内穴を設けていること、この板の外側にも別の薄板（SD5032）があることなどを確認。実測。

３・１　12区の溝を完掘。側板の底には３本の枕木を置いていたことがわかる。実測ののち写真撮影。暗渠の蓋板取上げ。重機による西側溝の埋戻し完了。

３・２　12区北端を重機で拡張し、溝の先後関係を検討する。のち側板や杭などを取り上げる。

３・３　テントや器材撤収。調査終了。

付　第223－13次調査　　6 AFF区Ｋ地区

1991年10月７日～1991年10月16日

10・７　第123－26次調査区と重ねて調査区設定（南北20m、東西４m）。重機により遺物包含層近くまで除去。一部で東二坊々間路西側溝（SD5021）の肩がみえている。南寄りにみえる第123－26次調査区の埋戻しの土も重機で大部分を除去する。

10・８　遺物包含層（暗褐色土）を掘下げ、西側溝の全体を検出。KGとKEライン上に西から西側溝に注ぐ細溝がある。西側溝掘下げ開始。

10・９　一部は西側溝の中層（暗灰色粘質土）の掘下げにかかる。木簡数点、和同開珎２点、緑釉熨斗瓦などが出土。

10・14　西側溝中層の掘下げほぼ終了。木簡3点出土。
10・15　西側溝完掘。木簡約10点出土。
10・16　午前、写真撮影。午後、実測。調査を終了。

K　第200次(同 補 足)調査

6 AFI区U地区
1989年3月2日～1989年4月20日（本調査）
1989年7月11日～1989年7月15日（補足）

3・2　調査区設定（東西約90m、南北4～15m)。重機によって盛土・耕土・床土の除去を開始する。
3・7　重機による排土完了。地区杭打ち。
3・9　33ライン以西について、南端N区から灰褐色土を除去して遺構検出を開始する。UN43・44区で二条大路北側溝（SD5105、この時点では一・八坪の北面築地の北雨落溝と呼ぶ）上層に瓦列を検出。
3・10　Pラインまで進む。40区以西ではO区で東西大溝（SD5100　この時点では二条大路南側溝と呼ぶ）を検出したが、以東では暗灰色土が次第に厚くなりみえない。
3・13　41ラインでO区東西大溝を浅く断割る。最上層は暗灰褐色砂質であり、その下は炭混りとなる。
3・15　北端Q区に到達し、折返し。35ラインに畦を設け、以東は暗灰色土掘下げ。35ライン以西は地山面で検出。
3・16　ベルトコンベヤーをN区に並べ、35ライン以西のO区東西大溝最上層を掘下げる。41ライン以西は炭層に入る。第178次、184次、186次北調査区から続く南北塀（SA4180）の北端を探るために、28・29区の南張出部で検出をはじめる。
3・17　35ライン以西はO区東西大溝の掘下げ。35ライン以東では、UN28でも瓦列があることを確認。
3・18　O区東西大溝は41ライン以西の炭層掘下げを完了し、木屑層に入る。35～40ライン間は炭層にかかる。
3・22　35～28ライン間でO区東西大溝の両肩を検出。最上層の掘下げ。28・29区の南張出部の検出ほぼ完了。南北塀（SA4372）と、北面築地の南雨落溝（SD5094）などを確認し掘下げる。27ライン以東にベルトコンベヤーを並べ、暗灰色土除去に入る。
3・24　27ライン以東でO区東西大溝を検出し、最上層の掘下げに入る。
3・28　O区東西大溝は38ライン以西の木屑層をほぼ完掘する。木屑層の下は黒灰色粘質土があり底となる。UO45区では木屑層中に栗の皮が一面に広がっていた。UO37以東は炭層掘下げ途中である。
3・29　O区東西大溝の、特にUO42区では木屑層と黒灰色粘質土の境に木簡多し。黒灰色粘質土では遺物が少ない。
3・30　O区東西大溝は37～33区で木屑層掘下げに入る。
4・1　調査班交替。旧調査班のうち史料調査室員2名は引き続き調査に加わる。朝一番にコンティナー500箱を搬入する。O区東西大溝はUO28～37区の木屑層を掘下げる。UO30以東では木屑層中に砂を含み、以西とはやや様子が異なる。
4・4　UO28～37区は一部で黒灰色粘質土の掘下げに入る。UNライン上の瓦列の実測をはじめる。
4・5　UO22～26区の木屑層の掘下げ開始。UO30以西は完掘。
4・6　O区東西大溝の花粉分析を行うため土壌を層位ごとに採集（金原正明氏)。
4・7　UNライン上の瓦列を写真撮影。
4・10　UNライン上の瓦列を取上げる。
4・11　瓦列の取上げ終了とともにN区の東西溝（SD5105）の掘下げに入る。O区東西大溝の土壌採取（金原正明氏)。
4・12　O区東西大溝（SD5100）の掘下げは工事用プレハブ位置をのぞいて完了。
4・13　全体の清掃開始。
4・14　11：00～空撮。午後、写真撮影。のちN区の東西溝（SD5105）下層を掘下げる。
4・17　調査区周囲の土層実測。N区の東西溝下層の掘下げ終了。この溝より古い南北溝を36区で検出。35ライン畦の土層を剝取り転写。砂入れ開始。
4・20　35ライン畦を掘下げる。O区東西大溝の木屑層から「天平八年」の木簡出土。砂入れを終え、調査終了。

補足

7・11　工事用プレハブがあるため、第200次調査で掘り残した部分（約40m²）について重機で床土まで除去。テント設営。

7・12　遺物包含層を順次掘下げ、O区東西大溝（SD5100）、N区東西溝（SD5105）を検出。それぞれ上層から掘下げ開始。

7・13　O区東西大溝は木屑層上面まで完了。

7・14　O区東西大溝の木屑層完掘。コンティナー約130箱分。木簡16点、軒丸瓦6225Aなどが出土。実測用の基準点を移す。N区東西溝も掘下げ終る。

7・15　10：00～写真撮影。のち実測。砂入れののち調査終了。

L　第204次調査

6AFF区J・K地区
1989年7月25日～1989年9月6日

7・25　逆T字形の調査区を設定（南北約60m、東西8～40m）。重機によって盛土・耕土・床土の除去を開始。

7・25　重機による排土が終了。地区杭打ち。I区以北（以下、北区）の北半は地山（砂地）がのぞくが、南半およびH区以南（以下、南区）は遺物包含層（灰褐土）がある。

7・28　テント設営。北区はベルコンを西辺31ライン、南区は南辺D・E区と東辺25ラインに並べ、排水溝を掘る。

7・31　北区は西から遺構検出。JN区以北は、ほぼ地山（砂地）であり、柱穴が出る。29区の南区では柱穴は南北に並ぶようである。JM区以南は、遺物包含層があり、この上面で検出にかかる。

8・1　北区では、JR区以北の29区で、南北塀（SA5345）とこれより新しい柱穴（SB5385・SC5290）を確認。KB～KD区には大型の柱穴がある。東西棟か（SB5390）。南区では、東・西両端を深く掘下げ、溝の重複を検討する。五坪の南面築地が想定されるGライン付近の、30～32区で大きな柱穴がある。門のようである。建て替えがありそうである。

8・2　北区は東から折返し、北半を精査をはじめる。。南区は北から折返し、遺物包含層を少し下げて検出に入る。西辺のHライン近くで東西溝（SD5335）出るが、30区以西はまだみえない。

8・3　南区東端のサブトレンチで土層を検討し、二条大路北側溝（SD5240）下層→E区東西大溝（SD5300）→二条大路北側溝中・上層の変遷を確認。

8・4　北区の北端を拡張し、大型建物（SB5390）の北庇を確認する。南区では門の規模を明らかにするため西に拡張するが新しい柱穴はない。東壁のサブトレンチの土層実測と写真撮影を行う。

8・5　北区では北半から柱穴の掘下げに入る。砂地の部分には土壌硬化剤を散布して遺構の保全を図る。南区ではJE区の二条大路北側溝上層の掘下げを開始する。

8・7　北区はJTラインまで掘下げ完了。南区は北側溝上層の掘下げほぼ完了。南門の南には、溝中に瓦列があり、写真撮影。D区に東西の柱穴列（SA5323）検出。

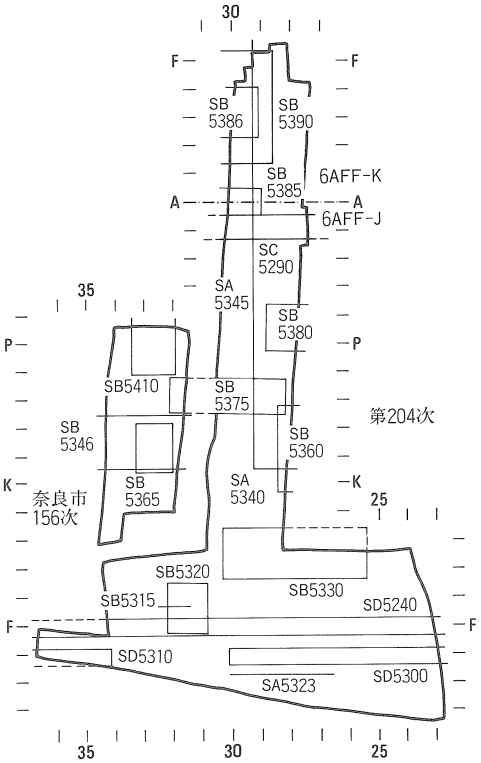


Fig. 14　第204次と奈良市第156次調査区遺構略図　1：800

8・8　北区はJL～JR間の遺物包含層を下げ気味にして削る。新しい柱穴列（SB5380）がでるが、まだまとまらない。南門の南の瓦列を実測する。

8・9　北区ではJN区近くまで進む。29区の南北塀（SA5345）も出つつあるが、遺物包含層が厚く検出ははかどらない。二条大路北側溝は上層の底の堆積(幅が狭い)を掘りはじめる。JE25では瓦が密集。

8・10　北区はJJ区まで進むが、柱穴はまとまらない。JK30区で井戸（SE5355）を検出。

8・11　北区は遺物包含層を掘下げてJI～JM区で精査する。南門前の瓦列を取上げると、下から東西溝がでてきた。両端は北に折れ曲り、二条大路北側溝とつながる。二条大路北側溝上層よりは古い。南門からの出入に伴う橋（SX5305）がある。

8・16　JHからJN区精査。H区で東西溝（SD5335）の東半部を検出。

8・17　南区の東北部を精査。いくつかの柱根（SB5330）があるが、掘形が見えにくい。清掃はじめる。

8・18　10：00～空撮。午後、写真撮影。

8・19　南区の二条大路北側溝の中層を下げはじめる。南辺で第198次B区との間の西半部を重機で拡張し、F区東西大溝（SD5300）の掘下げ開始。

8・21　東拡張区のF区東西大溝の掘下げ終了。のち実測と写真撮影。北区では調査区周囲の土層実測。

8・22　北区北端から柱穴の断割り調査に入る。大型の柱穴には礎板を十文字に使用している例が多い（SB5385・5386・5390)。南区では二条大路北側溝中・下層の掘下げ。

8・23　二条大路北側溝は28ライン畦以東を完掘する。F区東西大溝（SD5300）の上層を掘下げ、一部は木屑層に入る。西は30ライン付近で止まる。34ライン付近で再び東西大溝（SD5310）がはじまり、南門の前にはなかったことがわかる。

8・24　F区東西大溝は28ライン畦以東について木屑層まで完掘。コンティナー約100箱。南門は2時期あり、古い時期は掘立柱の棟門(SB5315）であり、新しい時期は礎石建ての四脚門（SB5320）でありと判明。南辺の東拡張の東半部の上土を重機で排土。明日、東西大溝を掘り下げる予定。

8・25　北区は柱穴の断割り調査を継続。井戸（SE5355）の掘下げに入る。二条大路北側溝は28ライン畦以西について、中層を掘下げる。東拡張ではF区東西大溝を掘下げる。

8・28　前日の台風17号の降雨で調査区が水没する。午前中は水替えに終始する。午後、北区では東端の一部を拡張して、単廊（SC5290）の柱穴を確認する。南区では二条大路北側溝と、F区東西大溝の掘下げ。東拡張区は写真撮影後に実測をはじめる。

8・29　調査員の応援をえて、柱穴の断割りと井戸掘下げを進める。

8・31　2：00～記者発表。2：30～空撮。3：40～写真撮影。

9・1　遺構の写真撮影。北区では礎板を実測。南区では西辺のF区東西大溝（SD5310）を掘下げ。

9・2　北区では礎板を取上げる。井戸の掘下げはかなり進む。2：00～現地説明会（参加者約150名)。

9・4　前日の降雨のため午前中は水替え。午後、北区は礎板を取り上げて砂入れ。西辺のF区東西大溝を完掘。

9・5　井戸枠取上げ。土層図の検討を行う。砂入れ。

9・6　午前中に機材を撤去し、調査終了。